The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	欧亜にまたがる露伴 ： 幸田露伴の参照した英文資料とその転用
Author(s)	橋本, 順光
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2019, 59, p. 55-90
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72098
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

欧亜にまたがる露伴
――幸田露伴の参照した英文資料とその転用

橋本　順光

1　百科事典としての英語

幸田露伴は、従来、江戸時代の文人の生き残りのようにみなされてきた。和漢の古典についての幅広い知識と、仏典や道教に関する深い理解にもとづいて書き継がれた膨大な著作は、いささか明治以降の文明開化に背を向けた感があり、釣りや将棋を好み、それについて蘊蓄を傾けた随筆とあいまって、東洋的な風雅の士という相貌をよりいっそう強固にせずにはおかない。当時の西洋式な高等教育を修了していないことも大きいだろう。実証の手続きや考察、論の構成、そして専門分野といった卑小な枠にさしてとらわれることなく、豊富な引用と紹介をゆったりと続ける筆致は、近代化によって失われた春風駘蕩とした時代を連想させもする。それはつまるところ露伴の博覧強記は「雑学の束」でしかないといった田辺元の批判とも通底しよう[1)]。好奇心と筆のおもむくまま織りなされる著作に、専門家にない自由をよみとるか、それゆえの放埒をよみとるかの違いともいえる。専門家でないため常識的な文献や方法をおさえていない弱みがある反面、専門家が読むことも想像することもなかった方法や文献で、従来の常識を覆す可能性があるわけである。いずれにせよ露伴の読書と執筆の範囲が広大で、一つの「学」問に収斂されず、全体像が「束」としてしかとらえられないことに変わりはない。

こうした独学の巨人として露伴と双璧をなすのは、同い年の南方熊楠だろう。二人とも正規の高等教育とはほぼ生涯無縁ながら、膨大な『大蔵経』と『ブリタニカ百科事典』を読み込むなど、その欧亜にまたがる博識で世を驚かせた点でよく似ている。ただし熊楠は、近年、研究が大きく進み、神話化されてきた語学力や学識の輪郭や限界が、ずいぶん明らかになっ

1）山本健吉『漱石・啄木・露伴』（文藝春秋, 1972）, p.166. なお以降の引用に際しては、適宜、新仮名・新字体を使用した。

た。しかし、露伴については、こと洋書の典拠や材源については、依然として研究が不十分と言わざるを得ない。確かに露伴は膨大な漢籍から引用や言及を繰り出しているが、同時に多くの西洋の文献を参照し、少なからざる洋書を使用している。露伴の最初期の著作「方陣秘説」が、英国の雑誌記事に多く基づいていることは1975年に指摘されたが、魔方陣を東西にわたって比較する手法については、いまだ詳細な検討はなされていない[2)]。そこで本論では、現段階で判明した英語文献の典拠を指摘すると同時に、その雑多な「束」から露伴が東西の往還に一貫して関心をもっていた可能性を明らかにしたい。

2　英語文献に由来する知識と表現

娘の幸田文によると、露伴は英語の「発音はあやしいがかなり読む」といい、「うちにあるオックスフォードのエンサイクロペジアを一々辞書を引かずに読」んでいたという[3)]。露伴と近しかった塩谷は、「エンサイクロペヂアブリタニカは露伴の蔵書で、時に何かを調べ、子たちには自由に出し入れさせた」とも記している[4)]。「子たち」の一人であった文は、重い事典を出し入れはしていたものの、さして読むことがなかったのだろう、オックスフォードというのは記憶違いで、露伴が日常的に読んでいたのはいわゆる『ブリタニカ百科事典』であった。英語が堪能であった柳田泉も、「英語はまず一人前の用を足すぐらいは十分読めた」と同様の回想を残している。当時でいう外国人教師から直接学ぶような「正則に勉強したことはなく、東京英学校（青山学院の前身の一つ）や電信修技校やで一年ほどずつ学び、それからはその方の心得のある人に時々質問して独学したのだが、それでも持ち前の根と頭とで、とうとうものにし、自身の必要な参考書や、読みたいと思った書物は、自由に読破出来た」という[5)]。

実際、露伴の著作物の中には、露伴による翻訳として刊行されているものがいくつかある。しかし、その場合、弟の成友が翻訳している可能性を考慮する必要があるだろう。露伴より6年ほど下の幸田成友は、一高から帝大卒業を経て東京商科大学に長く勤めた歴史学者である。日本経済史を講じる一方で、オランダに留学するなど東西交渉史でも業績を積み上げ、語学も極めて堪能だった。塩谷は、露伴訳とあるトルストイの「初陣」（1893）について、「そ

2）高木茂男「幸田露伴の「方陣秘説」（1975），日本文学研究資料刊行会編『幸田露伴・樋口一葉』（有精堂出版，1982），p.41.
3）塩谷賛『幸田露伴』下（中央公論社，1968），p.423.
4）塩谷賛『幸田露伴』中（中央公論社，1968），p.398.
5）『柳田泉の文学遺産』第二巻（右文書院，2009），p.172。同様の記述は、同書、p.147および柳田泉『幸田露伴』（真善美社，1947），p.33にもある。

れは弟成友が英訳から重訳したもの」であり、理由は「学費稼ぎにしたことを助けた」ためと記している。トルストイがクリミア戦争での従軍の経験を記した *Sevastopol*（英訳 1887・ロシア語原著 1855）の抄訳であろう、『国会』に連載したまま単行本になることはなかった「初陣」は、たしかに成友の学生時代に掲載されている。

成友の回想記「凡人の半生」（1948）を見ると、たしかに一高時代、成友は谷中の露伴の家に下宿し、しばしば翻訳したという。露伴やそこに出入りする名だたる関係者に触れるうちに、自分でもなにか書いてみたくなり、「偶々語学修行のために読んだトルストイの「セバストポール」の英訳の一部を訳して兄に示したら、兄はそれに縦横に加筆し、「初陣」と題して『国会』に載せた」とある。学費稼ぎの手伝いだったのか、下宿代の代わりだったのかは不明であるが、そのような下訳は「初陣」の後もしばらく続いたらしい。ここで注目したいのは、翻訳自体は成友であったにせよ、それを当時、人気作家だった露伴がなぜ筆を入れて刊行したのか、という関心のありかにある。成友は続けて、以下のように回想を続ける。

> それから帝国図書館の蔵本によって全訳した「グレート・フローズン・シー」、この方は小説でないから一向面白くはないが、『大氷海』と題し、単行本として博文館から出した。両書とも訳者として兄の名が掲げてあるのは、羊頭狗肉の謗を免れまいが、自分の手許に保存せられている『大氷海』の原稿の一部が、兄の自筆であることにより、兄が全責任を負うてくれた証拠とする。最後に瀧澤羅文子のために自分が口訳した小説は、ライダー・ハッガードの「キング・ソロモンス・マイン」で、同子は自分の口述を筆記熟読した後、換骨奪胎、幕末蝦夷の中央十勝岳附近に起った奇怪極る事件とし、「宝窟奇譚」と題して『国会』紙上に連載せられた[6]。

たしかに『大氷海』（1893）は、Albert Hastings Markham の *The Great Frozen Sea*（1880）のほぼ忠実な翻訳である。英国海軍軍人だったマーカムは、現在ではニュージーランド国旗をデザインしたことで記憶されるが、19 世紀の間中、英国が取りつかれたように繰り返した北西航路の発見のために、極地探検を試みた探検家の一人である。『大氷海』は、1875 年から翌年まで北極海を目指してアラート号にて航行し、氷海に阻まれて引き返した時の調査と探検の記録である。英国から北極海を抜け、ベーリング海峡から太平洋へと向かう北西航路は、もし成功すればヨーロッパとインドの距離を大きく縮めるという経済効果だけでなく、これまでの軍事的な勢力地図をも大きく塗り替えることになる[7]。1850年代のクリミア

6）『幸田成友著作集』7巻（中央公論社, 1972), p.69.

7）1845 年、北西航路発見を目指したまま行方を絶ったフランクリン隊の捜索は、ジャーナリズムで話題になるだけでなく劇や物語にもなり、大英帝国の威信をかけた探検の口実となると同時に、遭難

戦争がロシアの南下によって引き起こされた戦争であり、北西航路の発見で北海道より北方の地の地政学的な重要性が増すことを考えれば、「初陣」と『大氷海』は、北方への関心を高め、注意を喚起するという共通点があると指摘できよう。アラート号に乗り込む前、マーカムは捕鯨船アークティックに乗って北極海を航海した経験があり、『大氷海』のなかでも捕鯨についての言及は多いため、『いさなとり』（1891）を書いた露伴にとって興味をそそられるところも多々あっただろう。ただなによりも意識されていたのは、二人の兄である郡司成忠の千島拓殖とその後方支援であったはずである。1893年の初春、露伴は郡司の出発を見送っただけではく、友人の高橋太華らが発起人となった送別会にも全面的に協力している[8)]。「初陣」が掲載されたのは同じ1893年の7月から8月、『大氷海』が刊行されたのも同じ年の9月である[9)]。事実『大氷海』には、早くも冬が近づきつつある千島の兄を案じる露伴の序文が付されている。「吾兄微志を齎して千島極北無人の地に在り、糧食は乏きなり、船舶は足らざるなり、器具は難に遭ひて半を亡えるなり、屋舎は未だ成らざるなり、而して此篇載するが如く今や天は黒からんとするなり、海は凍らんとするなり」と、乏しい設備で冬を乗り越えられるかどうか「訳成って筆を投じ、瞑目時の移るを忘る」不安は、成友もまた抱いていたことだろう（32, 8）。序文の日付として「初秋月明夜」と書かれているのも、寒々しく月を眺めるしかないもどかしさを伝えていよう。

たしかに露伴と羅文連名の「宝窟奇譚」が掲載されたのは1892年のことだが、この頃、

者の間で人肉食があった可能性が大きな衝撃をもたらすなど、英国の文化史にとって極めて重要な事件となった。詳しくは谷田博幸『極北の迷宮－北極探検とヴィクトリア朝文化』（名古屋大学出版会, 2000）を参照。一方で、ジョン・フランクリンが日本に漂着したという奇説が示すように、もう一つのインドへの道となる北西航路は日本への関心とも重なっていた。フランクリン夫人は来日しただけでなく、ロンドンで岩倉使節団をもてなすなど日本と縁があるのも理由のないことではない。近年では温暖化による北極冠の縮小で、北西航路が期せずして可能となり、再びさまざまな物語や作品が発表されるようになってきている。その一端は、2018年4月2日付『産経新聞』関西版朝刊の拙稿「北の果て楽園伝説」を参照のこと。

8）塩野賛『幸田露伴』上（中央公論社, 1965), p.213.

9）この指摘は、拙稿「カーゴ・カルト幻想－飛行機崇拝の物語とその伝播」一柳広孝・吉田司雄編『天空のミステリー』（青弓社, 2012）の p.75 注 34 と重なっていることを断っておきたい。なお当時でいう「エスキモー」たちがフランクリン隊かその後続隊のことを口伝えで記憶していたという報告は、19世紀版カーゴカルト幻想を大きく刺激することになる。たとえば角幡唯介の『アグルーカの行方－129人全員死亡、フランクリン隊が見た北極』（2013）でいう「アグルーカ」は、イヌイットの伝説に残る探検に訪れたヨーロッパ人のことを指している。2014年、2016年と、イヌイットの伝承と協力にもとづき、フランクリン隊の二つの船が見つかったことは世界でも話題になった。こうした調査もまた北西航路が現実化してきたなか、公海や航路の覇権をめぐる各国の思惑のなかで行われていることはいうまでもないだろう。幸田兄弟が関与した時から、地政学的な構図はいまだ変わっていないともいえる。

郡司は千島への移民を本格的に各所へ働きかけ、同じ年には海軍に千島への移民を提案するも断られており、北方への関心と熱意はおそらく露伴も共有するものであったろう。したがって、アフリカを北海道に置き換えて翻案したのも、単に露伴が余市で勤務していたという経験からだけではあるまい。そもそも Haggard の *King Solomon's Mines*（1885）は、アフリカの奥地に隠されていたソロモン王の財宝を英国人探検隊が奪取しようとする極めて帝国主義的な小説である。北方の未開の地に、先祖が残した遺産があり、その発見と所有を鼓舞する物語は、容易に北方への拓殖を正当化することにもなるだろう[10)]。たとえ成友が翻訳したとしても、これらの露伴がかかわった 3 点の英語文献からは、関心の場所や主題の傾向が比較的明瞭に読み取れる。自由自在に引用と考証を加える広大無辺にも見える和書や漢籍の教養と違い、西洋の書物に関しては、ある程度までの関心がある分野でなければ、推敲や翻案にしても食指が動かなかったということでもあるだろう。

だからといって、露伴が英語の文献を自力で読まなかったわけではない。小説第一作の『露団々』（1890）の初版には、例言に「無名翁の地盤は、ぽいす氏の魔方陣なり」とあり、作中で一老人が説明する魔方陣が、欧米の文献から採ったことは露伴が記す通りであった。露伴の死後に見つかった「方陣秘説」という原稿には、「イー、ボイス氏、書ヲノーレッジ雑誌ニ寄セテ其ノ奇妙幽玄ノ方陣ヲ報ゼリ」（40, 10）とあり、それが *Knowledge* 誌に基づくことが明らかになったからである[11)]。この雑誌 *Knowledge: An Illustrated Magazine of Science* は副題が示すように、科学をわかりやすく説明する記事や詰将棋のようなチェスの問題などを満載しており、そうした記事に関して読者は投稿することも可能だった。関連する情報の提供や、新たに作った問題や別解を共有できたのである。熊楠が常連の投稿者であった『ノーツ＆クエリーズ』誌にも似て、質問と回答とを投稿するコミュニティになっていたのだった。雑誌の扉には、テニソンの長詩『イン・メモリアム』（1850）から、「知識から次々に知識を育てて増やせ」（Let Knowledge Grow from More to More）というモットーが掲げられており、雑誌『知識』がそんな知識の連鎖の場たろうとしたことがよくわかる。露伴のような好奇心あふれる独学者が、愛読したであろうことは大いに考えられる。露伴が利用した魔方陣の記事もそんなふうに同誌を愛読していた常連投稿者の手になるものであった。

10）むしろこの物語は、日本の南方進出にしばしば援用され、北方で用いられたのは源義経の伝説であった。詳しくは拙稿「山田長政の秘宝譚―『日東の冒険王』からオーストラリアの伝説まで―」『日本研究論集』（11）2015 および拙稿「義経＝ジンギスカン説の輸出と逆輸入－黄禍と興亜のあいだで」河野至恩・村井則子編『日本文学の翻訳と流通』（勉誠出版, 2018）を参照。

11）以下、幸田露伴の引用に際しては、特記しない限り、『露伴全集』全 41 巻（岩波書店, 1978 － 1980）を利用し、巻と頁の数のみを括弧内に明記する。

具体的にいえば、「方陣秘説」の「説明第八」にあるボイスの魔方陣は（11）、Florence E. Boyce の紹介する 234 番の記事にもとづいている（図 1 右下）。続く「説明第九」で、「バッチェット」（Bachet）や「ポイグナード」（Poignard）による魔方陣の法則を確認したうえで、「スナルト」（Snart）の方陣こそ「天下第一」と紹介しているのだが、実はこれは J. A. Miles の 233 番の記事の要約である（図 1 右上）。ボイスの詳細は不明であり、もし *Sunshine and Cheer from Vermont*（1931）という詩集を出したのが同姓同名の別人でなければ、アメリカに在住していたことになる。一方、マイルズは、英国のノーフォークに住み、フルネームは John Augustus Miles といって、詰将棋のようなチェス・プロブレムの名作成者であった。『ノレッジ』誌でもたびたびチェスについて投稿しているほか、*Poems and Chess Problems*（1882）や *Chess Stars: A Galaxy of Self-mates*（1888）といった関連の著作も残してる。

露伴が、ボイスとスナートの魔方陣を最後に紹介したのは、これらを見れば、古代中国の魔方陣といえる河図洛書が「取ルニ足ラザル」ことがわかるからだという。冒頭で「アウガスト、カント」こと Auguste Comte による神学から哲学、そして科学へという三段階説を「名論」として紹介し、それを「神怪」「想像」「実理」と訳して、魔方陣にも当てはめるのである（3）。つまり、魔方陣もまた法則を知ってしまえば、何ら「神秘」でもなんでもないにもかかわらず、むやみにありがたがる弊害が東洋を覆っており、さすがにインドは寺院にあるぐらいなものの、それでも占いのようなものに使っていると批判するのである（4）。そしてボイスとスナートの魔方陣は、その仕組みは「窮知スベカラズ」（10）と匙を投げざるをえないものの、いつかその原理がわかるはずだとも述べている。興味深いのはそこで露伴が、「第一因由」ことアリストテレス以来の第一原因を根拠にして（13）、神の存在を前提とし、それゆえ知識は無限ではなく有限だと結論づけるところである。鶏が先か卵が先かを決定できないため、「神ニヨリテ作ラレタル天地万象」を想定せざるを得ないように、「何ノ事ノ故ニ神ハ此ノ意思ヲ生ゼシヤハ知ルアタワズ」（13）からそこに神の意図を想定するというのは、キリスト教の布教や教義問答の定石だった[12)]。露伴の家族や友人にはキリスト教徒も多く、こんな議論は身近だったのかもしれない。魔方陣もまた、無限にみえる数を規則と原理で作られた図表に閉じ込めるゆえに、そんな原則を作り出した神の摂理を証明するということなのだろう。

このように露伴の最初期の著作「方陣秘説」は、題材も議論の展開もかなりを西洋に負っている。たしかに後年の露伴が得意とした考証的な随筆とは異質にうつるが、膨大な和書や

12）詳しくは拙稿「タマゴが先かニワトリが先か－神の証明から環境決定論まで」『横浜国立大学教育人間科学部紀要 . II, 人文科学』10,（2008）を参照。露伴の家族にはキリスト教徒が多く、こうした教義問答は身近だったと思われる。

漢籍からの言及にあって目立ちはしないものの、欧米の事例や文献がしばしば言及されるところや、コント流の技術発展論はその後も底流しているとさえいえる。世評とは裏腹に露伴が欧米の思潮や著作にも目配りを怠らなかったことに驚き、それが英語を通してのものだったことを回想したのは、斎藤茂吉であった。茂吉は、鴎外などとは違って、露伴の著作は「和・漢・印度・西洋の融合」であり、「その摂取の有様が最初から同化的なので、西洋の香をば批評家が見免すのである」と指摘している。実は「西洋文脈の滲んでいることに人は気づかない」というのである[13)]。

そんな一例として茂吉も挙げている初期作品「風流悟」（1891）中の「浄玻璃の絶縁者」という語句について、もう少し詳しく見てみよう。「絶縁者」に「インシュレートル」とルビを振っていることから、これがInsulatorを指すことがわかる。露伴は、「絶縁者」を恋にとらわれた自己を牢獄の比喩で説明する際に登場させている。つまり、「真の好ましき牢獄」とは「悪魔の蠱惑の大手腕より発する強電気と、其に感じ易き傾きを有せる実証ある人との間に立てる浄玻璃の絶縁者として存する」（380）というのである。これは露伴が成行として余市で電信技手として働いていた1885年から1887年までのあいだ、日常的に目にしていた電信柱を念頭においた表現ではないか。つまり、「悪魔の大手腕」というのは電信のケーブルで、そこから運ばれるメッセージに人は一喜一憂する一方、そのケーブルをつなぐガラスの絶縁体は、そんな電子情報からも人の輪からも孤立し、生前の行いを映す地獄の鏡のように、伝聞に翻弄される様子を照射するというわけである。「美わしきインシユレートルをもつて囲まれたる我は詐欺、暴力、妖術、毒薬、其他種々のものと全く縁を断ぜられしなり」（381）というのも、重要な情報ながら関与することはなく、ひたすら電報を書き起こして仲介するだけだった露伴の孤絶した境遇と無縁ではあるまい[14)]。美しいとあるのも、当時のガラス製の絶縁体は早くから収集の対象となっており、決して誇張ではない。「彼のインシユレートルの破砕し易く、彼の鉄壁の脆きときは悪毒の物の攻撃を感じて自ら両頭の怪物となり、恋と我欲の離れざる想に沈」む（385）というのも、絶縁体が割れて電線がショートやスパークする事故に、恋と欲の発作的な情動に翻弄される自己を重ねたものなのかもしれない。

こうして電信の職を放棄して、東京へ向かった際のことを記した「突貫紀行」（1893）にも、露伴と洋書とのかかわりを示す一節がある。「客窓の徒然を慰むるよすがにもと眼にあたりしままヂグビー、グランドを文魁堂とやら云える舗にて贖う」（395）と、函館で旅の供に英国の小説を購入しているのである。これはGeorge Whyte-Melvilleの第一作 *Digby Grand*

13）斎藤茂吉「露伴先生に関する私記」（1938），日本文学研究資料刊行会編『幸田露伴・樋口一葉』（有精堂出版，1982），p.9.

14）新日本古典文学大系明治篇22『幸田露伴集』（岩波書店，2002），p.381.

（1852）のことであろう。安穏とした学生時代を経て一念発起して軍隊に入り、北米に従軍した後、故郷で結婚して居を構え、キツネ狩りを楽しむ毎日を送るという自伝的小説である。小説は成功し、ホワイト＝メルヴィルはハンティング小説で名を馳せるが、こうした心機一転を経た幸福な生活という小説と、その第一作での華々しい成功という露伴とも重なる点が少なくない境遇に、どこまで意識していたのかどうか、残念ながら露伴は何も語ることがなかった。なおクリミア戦争に際してホワイト＝メルヴィルは従軍を志願し、*The Interpreter*（1858）で、激化するセヴァストポリ攻略作戦での陰惨な経験を活写している。つまり、セヴァストポリにてトルストイはロシア側に、ホワイト＝メルヴィルはトルコ側に従軍しており、それぞれ小説を残したことになるが、露伴が *The Interpreter* を知っていたかどうか、目下のところ知る手立てはない。

ただし、洋書から知識や手法を貪欲に取り込む手腕は、露伴の小説第一作『露団々』（1890）でも遺憾なく発揮されている。ストーリーや形式こそは中国の白話小説を踏襲しているが、主な登場人物としてユニテリアンのアメリカ人を登場させ、欧米の無数の固有名詞や言い回しも過剰なまでに言及している。アメリカでの中国系移民排斥法（1882）をふまえて、富豪ブンセイムの執事シンプルが中国人に対して、「彼れは支那人です。放逐案のある支那人です」と罵倒の言葉を吐き、さらに「元来鼠の肉を食う人種は及第する筈はない」とか「あの豚の尾を三だいむ計りで買って鞭の先にしたら如何」（118-9）といった侮蔑を繰り返すのは、正確にアメリカでの排斥運動の常套句をふまえている。シンプルという名も、単純というだけでなく、無知で愚鈍という意味もふまえての命名だろう。食習慣を悪食として誇張した“Rat eater”という蔑称や弁髪を“Pigtail”と記すのは、英語では19世紀には定番の表現となっており、鼠を食う姿や、街中の人間が弁髪を引っ張るなり、切り取るなりする様子を描く挿絵も珍しくなかった[15)]。「豚尾」（60）という表現はかなり初期の例であり、露伴が初めて翻訳したとはいえなくとも、こうした英語表現を念頭に置いていたことはまず疑いあるまい。

洋書を利用した可能性がもっとも高い一節としては、「彼のうをるたアすこツとが、人類の進歩を童子に諭すに、燕巣を例に引いたのを読んだ事があります」が挙げられる。これについては「少年読物『祖父物語（明治十八年に『寿其徳奇談』として横山鉾呂久の翻訳がある由）』」にあるか」とすでに示唆されている通り、Walter Scott の *Tales of a Grandfather*（c1827）をふまえている[16)]。抄訳の『寿其徳奇談』では収録されていない第一章「社会における文明の進歩」の冒頭で、神は動物を造った時、向上や改善ができないよう、それらがお互いに意思疎通できないようにしたとして“the swallow, the wren, and other birds,

15）たとえば胡垣坤編，村田雄二郎・貴堂嘉之訳『カミング・マン―19世紀アメリカの政治諷刺漫画のなかの中国人』（平凡社，1997）などを参照。

16）『幸田露伴集』（岩波書店，2002），p.25.

which cover their nests with a roof to protect them against rain, is never imitated by other classes, who have continued to construct theirs in the same exposed and imperfect manner since the beginning of the world”[17] と記されている。興味深いのは、露伴は、この箇所を恋に悩むシンジアに語らせており、さらに「人類の家は穴居より藁葺に進み、夫れより木造煉瓦作りと段々進で、水晶宮の如き美しき者になりましたが、誠に心の上の進歩を見ますれば、禁果を食いし太古のあだむいぶと、今日の男女と、大なる差がありましょうか」と続けて、むしろ住居の進歩に比して、精神は何ら進歩していないことを対比するのである[18]。これは燕などが屋根を利用して巣を作るものの、ほかの動物たちは意思疎通ができないために太古から雨露にさらされたままという、スコットの後半の記述と呼応するものであろう。ルビナに求婚も説明もできず、意思疎通から絶縁されたシンジアは「悪魔の蠱惑」に悩まされ、「野蛮世界に住居するを甘んじ」ざるを得ないわけである。

シンジアとルビナが結婚して大団円となる小説の終盤でも、洋書からの引用が巧みに使われている。講釈師のように物語から教訓や感懐の付言へと移行するだけではあまりに中国の白話小説そのままであるからだろう、露伴は「ろッしぶりユんの言の如く、男女婚礼したる時は彼等の歴史は始まり、小説は止む」という一節をその直前に挟み込んでいる[19]。これは E. A. Washburn の “The novel ends its last chapter with the wedding; but the real history begins in the next volume” の翻訳とみて差し支えあるまい。聖職者のウォッシュバーンがニューヨークの教会で行った説教「結婚の聖なる状態」（“The Holy Estate of Matrimony”）にある一節である[20]。『露団々』が描く際に参考資料として読んだのか、その場合、原典で目にしたのか、翻訳を通してなのかは目下のところ不明である。したがって「ろッしぶりユん」という表記は「ヲッシブリュン」だったかもしれないのだが、翻訳か紹介にあった表記なのか、露伴の誤記なのかは現段階では判断できない。ただし、露伴が原文を参照した可能性は高いといえる。というのも、説教の趣旨にそってそのまま翻訳すれば、「小説の最終章は結婚で終わるが、本当の歴史はその次の巻から始まる」となり、華やかな結婚式の後でこそ本当の結婚が始まるという順番を、露伴は逆にしているからである。幸福に結ばれた二人のその後は彼らが刻むべき物語であって、これ以上、小説は立ち入るのを控えるというような意味を示唆することで、この順番の方が小説を締めくくる終章にふさわしいと考えたから

17）Walter Scott, *Tales of a Grandfather,* vol.1 (Paris: A. and W. Galignani, 1829), pp.3-4. 本書は今なお復刻されており、露伴がどの版を利用したかは不明である。

18）『幸田露伴集』（岩波書店, 2002), pp.25-26.

19）『幸田露伴集』（岩波書店, 2002), p.156.

20）E. A. Washburn, “The Holy Estate of Matrimony”, *Churchman*, 30 March 1878, p.358. この題目は、いわゆる結婚式の誓いの言葉で登場する有名な文句である。

ではないか。露伴の魅力と特技の一つに、博引傍証もさることながら、およそ無関係にみえる思いもかけないところから引用をもってきて本文へとつなぎ合わせるところが挙げられるが、その本領は早くも発揮されていたといえるだろう。

3　英語文献の編集と少年文学

茂吉が示唆したように、露伴は和漢の書籍だけでなく洋書も巧みに「摂取」し「融合」させていた。文字通り「同化」し、出典を記していないものの、実のところ翻訳でしかない作品もいくつか指摘できる。多忙なせいでもあったろう、特に少年向けの読み物に多く、それらは生前には単行本に収録されることがなかった。これは当時の子供向けの雑誌には、英米の児童雑誌を参照して翻訳したような記事が多く、いわば書き飛ばし読み捨てられることがほとんどだったことを考え合わせる必要があるだろう。露伴の家に下宿していた成友が露伴の下訳を行っていたことは前述したが、同時期に成友は、別の縁で児童雑誌の編集にもかかわっていた。一高の2年先輩に山形五十雄という英語の達人がいて、その長兄悌三郎が『少年園』という当時の代表的な子供向けの雑誌を発行しており、五十雄の家で「編輯材料として取寄せられた」少年雑誌をよく見たという[21)]。「一つが『少年の友』Youth Companion今一つが『セント・ニコラス』St. Nicholas」だったというが、英語力を買われた成友が、これらの雑誌から紹介記事を書き、翻訳したであろうことは、想像に難くない。

露伴が成友の下訳を使って、「初陣」や『大氷海』を発表する1年前の1892年、『少年園』と並ぶ児童雑誌『小国民』から原稿の依頼を受けている。その「慢心男」には、「学齢館の高橋太華から少年小説を依頼されたが、「心の疾あり」固辞したものの聞き入れてもらえず、するとたまたま机上に「李魚の一家言あり、乃ち其一節を翻案して一時の責を塞ぐ」と、断り切れなかったため翻案でお茶を濁すという断り書きがわざわざ冒頭に置かれている（10, 240）。しかし、露伴はその後も依頼を断りきれない義理があったのかどうか、翌1893年から『小国民』へ立て続けに10本ほど2年に渡り寄稿を続けている。そして1893年3月下旬号に「交友論」の後半を寄せた際には、先の「方陣秘説」を転用したような記事まで掲載されているという[22)]。これらのおそらくは急ごしらえの原稿のうち、ヨーロッパと関係の深い「陰徳陽報」（1893）、「北氷洋」（1893）、「瑞典国の冬」（1894）、「風船旅行」（1894）は、多くが英語の典拠にもとづいている[23)]。時期と内容からいっても成友が協力した可能性は高い

21）『幸田成友著作集』7巻（中央公論社, 1972), p.68.

22）高木茂男「幸田露伴の「方陣秘説」, 日本文学研究資料刊行会編『幸田露伴・樋口一葉』（有精堂出版, 1982), p.38.

23）露伴は、英語文献に限らず、和漢の書籍を同様に転用した例が複数あることが、高島俊男、須田千

が、先の下訳に見られるように、漢籍に比べて洋書は自在に読めないからこそ、題材が関心のあるものに限られていることが多く、その選択と典拠の編集は一考に値するように思われる。

第一に「陰徳陽報」についていうと、これはThomas Dayの長編 *The History of Sandford and Merton*（1783-1789）の中で独立して語られる物語 “The Grateful Turk” の翻訳である。トマス・デイはルソーの思想に共鳴し、奴隷解放運動に深くかかわった。この小説で二人の少年を対照的に描いているのも、生来、善良である子供が環境と教育でいかほどに変わるのかを描くためである。この小説はベストセラーとなり、作中の「感謝するトルコ人」はこれだけ別途に短編としても愛読された。もともと500ページにもなる小説なので縮約版など無数の版があり、「陰徳陽報」はおそらく子供向けの短編集から翻訳したのだろう。ヴェネツィアで奴隷として売られてきたトルコ人のハメットが、フランシスコから受けた恩義を忘れず、後に奴隷となったフランシスコを救い出す物語であり、「陰徳陽報」という故事は、読者になじみのない内容を的確に要約している。以下、それぞれの冒頭を引用する。

> It is too much to be lamented that different nations frequently make bloody wars with each other; and when they take any of their enemies prisoners, instead of using them well, and restoring them to liberty, they confine them in prisons, or sell them as slaves. The enmity that there has often been between many of the Italian states, particularly the Venetians and the Turks, is sufficiently known[24].
>
> 古より二国争を干戈に訴うるため、無辜の兵士はあたら貴重の生命を鋒鏑に隕し、囚虜は獄舎に物憂き年月を過し、或は奴隷に売られて虐待酷使せらるるためし数多ありしかど、伊太利（殊にベニス人）と土耳古との如く怨恨結んで解けざるは歴史上にも著しき事共なり。（298）

原文の意味を損なわず、しかし、「流血の戦争」という原語からは「無辜」や「貴重の生命」という兵士側の言葉を引き出し、「閉じ込める」という原語からも「物憂き」という捕虜の感情を露わにするなど、奴隷の物語の冒頭にふさわしく、外からではなく当事者から描く視点が明確に訳文で展開されている。言葉を補う一方で、2文を1文に圧縮し、干戈に訴える

里、中原理恵らによって指摘され、続々と成果が積み上げられている。今回は十分に参照できなかったが、これらの転用は児童文学に限定されるものではなく、今後は、先行する研究をふまえ、言語の別を越えて総合的に論じる必要があることを改めて確認しておきたい。

24）Thomas Day, *The History of Sandford and Merton* (New York: World Publishing House, 1875), p.130.

戦いと、その結果、両国の怨恨が解けないという表現を使うことで、二つの国の二人の禍福が縄のように結び合わされてほどかれるという、主題の伏線としても機能していよう。

内容からいって、教育的な読み物としては申し分ない。ではなぜ露伴は、この物語に注目したのか。一つには、「陰徳陽報」（1893年9-10月号）に先んじて、尾崎紅葉が『侠黒児』（1893年6月）を博文館の少年文学叢書の一冊として刊行し、話題になっていたことが考えられる。この『侠黒児』はつとに指摘があるように、Maria Edgeworth の短編 “The Grateful Negro”（1802）の翻案であり、そのことは刊行すぐの『早稲田文学』8月号でもすでに触れられていた[25)]。

トマス・デイはエッジワースの父と親しく、両人共にルソーの主張に共鳴していたので、題名からしてエッジワースがデイの短編を意識していたことは明らかだろう。この物語のほかにも、トマス・デイは助けたライオンに助けられたアンドクレスの逸話を作中で紹介しており、「感謝するトルコ人」も同じ話型の変奏として語っていると考えられる。しかし、たとえ古くからの報恩譚の形式であれ、ルソー主義にもとづいてトルコとヴェネツィアの両人を等価に描いたのは、当時としては画期的であった[26)]。すでに「方陣秘説」にも見られたように、東西の文化交渉に関心を示していた露伴が、どのようにして知ったのかは不明なものの、いわゆる紅露時代にあって『侠黒児』に刺激され、その翻案に先行する作品に注目したというのは、十分に考えられるのではないか。

もう一つの要因としてはトルコ人の登場が挙げられる。「陰徳陽報」を掲載した『小国民』を編集する高橋太華と露伴の共通の友人に、山田寅次郎がいる。1890年、トルコのエルトゥールル号が和歌山で遭難した事件に際して、山田は義援金集めに奔走した。1892年1月には義援金をたずさえてトルコに渡り、歓待されてそのまま滞在し、両国をつなぐ実業家として成功をおさめる。郡司の時と違い、山田は海軍の協力を得て、英国船で単身トルコへと向かっていることも注記しなくてはなるまい。敏腕な山田は露伴の才能を見抜き、雑誌への売り込みや、『露団々』の刊行のために尽力するなど、露伴の作家活動を軌道に乗せた立役者だったのである。そんな露伴も、作家としての出発を祝った宴会からそのまま栃木の佐野まで出かけた山田との珍道中を記す「酔興記」（1893）、一時帰国した彼から話を聞いてであろう、山田をモデルにした小説「書生商人」（1892）を発表するなど、二人には濃密な交友関係があった。高橋もまた、山田の送別会に参加し、トルコ行を見送っていることがその日記から

25）李敏永「尾崎紅葉『侠黒児』試論－ *The Grateful Negro* との比較考察を通して」『藝文研究』90（2006）, p.97.

26）George Boulukos, *The Grateful Slave: the Emergence of Race in Eighteenth-century British and American Culture* (Cambridge: Cambridge University Press, 2008), p.152.

明らかになっている[27]。遭難したトルコ人たちに助力を惜しまなかった山田が、トルコで厚く歓待されて貿易業を始めるというのは、まさに陰徳陽報であろう。掲載された1893年9月は、山田がトルコに発って一年半あまり、露伴が「書生商人」（1892）や「酔興記」（1893）を書いた頃とほぼ同じ時期である。原稿を書いた露伴と受けとった高橋が、どこかで山田を連想していたとしても不思議ではないだろう。そのせいかどうか、物語の末尾は以下のように結ばれる。原典と対照させて引用しよう。

> Francisco and his son embarked, and, after a favourable voyage, arrived without accident in their own country, where they lived many years respected and esteemed, continually mindful of the vicissitudes of human affairs, and attentive to discharge their duties to their fellow-creatures. (12)
> 斯てフランシスコ父子は日数経て故国に帰り、外には商業を励みて巨万の富を致し、内には鰥寡孤独を憐みしかば、国人の尊敬する処となり令聞愈々加わりしとぞ。めでたしめでたし。

トルコからヴェネツィアに無事帰国したフランシスコ父子が、「人生の有為転変を常に忘れることなく、周囲の人々に対する義務を怠らなかった」という原文に、商業で成功したことを付言し、「めでたしめでたし」と結んでいるのは、山田の活躍と祝意がどこか脳裏にあったためなのかもしれない。

この「陰徳陽報」の翌11月から12月にかけて掲載された「北氷洋」（1893）は、ハメットやフランシスコに続いて海を越えて雄飛するよう、少国民の読者に呼びかけた文章である。かつては海賊や捕鯨で活躍した「四囲皆海の国の民」が、徳川の大船建造の禁からこのかた、すっかり「水上の思想」に乏しくなってしまった現況を嘆き、いずれ「膨脹し何の日か発育して、西欧諸国と雄を争い力を闘わす」島国のため、「少年諸子」は「海事に意を注くべし」というのである（10, 309-310）。筆はそれと記すことなく、同じ年の春に千島へ向かった実兄の「郡司大尉の短艇遠征」に及ぶ。前述したように、郡司の送別会発起人の一人は、『小国民』を編集していた高橋太華である。勢い筆致は激しくなり、これくらいのことで「空しく吃驚し、空しく怪訝し、空しく批難し、空しく疑懼するが如き、豆ほどの膽の男のみ多かりしならば、英国は決して雄を世界に称する時代に到達すること無からむ」（310）と、激しい調子で同じ島国の英国と対比をしてみせている。そんなふうに国民が海事に注意を怠っ

27）詳細は、出口智之「山田寅次郎と幸田露伴―若き日の交遊―」山田寅次郎研究会編『山田寅次郎宗有―民間外交官、実業家、茶道家元―』（宮帯出版社, 2016）を参照。

ているあいだに、「欧洲諸国民は数立って海上に偉勲を成したる者あり」として、同じ 1893 年に「エラム」号（後述の典拠の原文では *Fram*）で出発したナンセンの紹介へと話題は移り、そのような人が現れない「今日の如く水を怖るる家鶏同様の弱虫のみにて填められたる国」への嘆きが続く（311）。そこで、ナンセンや彼に続く海上の人への期待を込めて、「今は聊か北氷洋に対して、各国の学者、冒険家、海軍軍人の為したる梗概を告ぐべし」と一段落が結ばれるのである。

以降、「北氷洋」の後半 6 割は、その「雄を世界に称する」英国の雑誌記事から圧縮した翻訳が続く。典拠は、1883 年に創刊され、雑学満載の記事に豊富な挿絵が売り物の月刊誌 *English Illustrated Magazine* で、その 1893 年 7 月号に掲載された Andrew A. W. Drew の "North Pole Up To Date: A Sketch" である。Drew の記事も、冒頭の一段落はナンセンの北極探検から始まっており、以下、あまり知られていない北極探検史を振り返ることが記されている。露伴は、これをそのまま読者への奮起につなげ、同じくナンセンを導入としたのだろう。それではまず Drew の第二段落を引こう。

> Popular sympathy has always gone rather with those old explorers who many years ago went out into the frozen North to discover what was called a North-West passage to India, and later on, even more, with those who were despatched in search of the lost Franklin expedition, for these things commended themselves to the minds of Englishmen as being worthy objects of pursuit, and as leading to certain definite and desirable results; but not many have cared to turn their attention to the much more arduous and difficult task of completing the map of the world by the discovery of the North Terrestrial Pole and the lands or seas surrounding it. A glance at a chart of the Arctic regions will reveal the fact that, up to the present moment, there is a circle of about nine hundred miles in diameter, with the Pole as its centre, within which no human foot has ever yet been placed.[28)]

興味深いことに、ここで Drew は露伴同様に、地図の空白を埋める作業について、英国人の関心が少ないことに注意を喚起している。インドへ抜けられると北西航路を信じて氷の海に出帆した英国人にとっては身近な先祖、もしくは連絡が途絶えたフランクリン隊の捜索といった確実に成果が得られることばかりに関心が集まってしまい、それよりもはるかに困難

28）Andrew A. W. Drew, "North Pole Up To Date: A Sketch", *English Illustrated Magazine*, 1893, July, p.735.

な地図の空白を埋める作業に注意が払われていないというのである。そして地図をみれば、人跡未踏の 900 マイルの円がぽっかり空いていることに気付くはずだと続け、第三段落で、現段階での課題を整理している。

> The question now agitating the scientific world is, can this magic circle be broken through, and, if so, to what extent, and by what route? Above all can the Pole itself be reached? England, Russia, and America have each in turn tried to solve this problem; and amongst them they have endeavoured to approach the Pole from every possible direction within the Arctic basin. (735)

英米露が、この北極圏にどこまでどうやって到達できるのか、長年とりくんでいるとして、英国が当事者にほかならないことを強調している。そして、あらゆる方向から探検が試みられているとして、各国が競合する探検史という本論へと移るのである。ややもすれば感傷的な関心が英国人にばかり向けられてしまい、測定と航路の発見という科学的な調査がおざなりになってしまうことを危惧するのは、ナンセンというノルウェーの探検家が登場してきたことへのある種の危機感とうらはらでもあるだろう。いわば読者に奮起を促す導入という点で、Drew と露伴は多くを共有しているのである。

ただし、これをそのまま訳述したのでは、「北氷洋」の文意にそぐわない。露伴は、順番を入れ替え、北極点が地図の空白地帯であることを強調し、そこから探索した人々と彼らへの関心が続いたというふうに語句を変更することで、自身の主張と翻訳とのつなぎめが目立たないよう苦心している。該当部分を引用しよう。

> 試みに地球全図を繙きて北部を一瞥せよ。氷雪の地の記載せらるる者も少なからねど、真の北極を中央点として直径九百英里の圏中に人間の足跡の未だ到らざることは明らかなるべきが、是は恰も社会一般が、欧州より印度に達すべき北西航路を発見せんとて氷海に赴きたる往時の探検者、又は踪跡を失いたるフランクリンの遠征隊捜索に行きし人々に同情を表し、却て地球の北極及び其周囲の海陸を発見して世界の地図を完全にせんとの大目的を以て艱難を冒せるには同感を有せざると相同じというべし。現今学術世界を聳動せる大問題は、人間の果して其地球図中に記載せられざる圏中にも入るを得べきか、若し又入るを得とせば如何なる航路を取りて那処の点まで進み得べきかと云うにあり。就中北極点には果して着し得べきものなりやというに就ては、英国魯国米国等は各奮って其難題の解釈に当り、北氷洋の最外圏諸所の点より北極に接近せんと尽力せり。

先に地図をとりあげ、かつて北西航路に挑戦した航海者から、今日の探検隊まで社会一般の「同感」は変わらないとやや強引にまとめてしまってはいるが、それ以外は、ほぼ忠実な翻訳といってよい。以降も、適宜、省略をまじえつつも、原文内容をそのまま翻訳して紹介した文章が続く。「ランゲル」（Wrangel）から始まるロシアのシベリア探検と「マストードン」の発見の記述、シベリア沿いに進んでベーリング海峡を抜けるという北東航路を発見した「ノルデンスキョルド」（Nordenskjöld）、アメリカの「リシャ、ゲント、ケーン」（Elisha Kent Kane）に「ハイヤス」（Hayes）、そして英国の派遣した「アレルト」号（Alert）などが端折って説明され、ナンセンの成功を祈るとともに、「吾が邦よりもまた学術上に大膽勇猛なる人の出でんことを祈るの情に堪えざるなり」と、最後は前半と呼応するよう、原文にはない露伴自身の言葉で締めくくられている。

「北氷洋」では典拠と同様に説明がなく、補記もされていないが、この「アレルト」号で派遣された探検家がマーカムであった。2か月ほど前の1893年9月、成友とともに刊行した訳書『大氷海』とともに、ナンセンという「氷海暗黒の北極に向って一大偉勲を立てんとする好漢」（10, 311）を称賛する「北氷洋」もまた、千島で厳しい冬を迎えていた郡司一行への陰ながらの支援であったことは疑いあるまい[29]。『大氷海』の序文が書かれた「初秋月明夜」の段階で、もはや「雁魚は既に通ずるに由無きなり」と、通信や手紙の手段は途絶えていたので、相手には伝えようのないところでの協力であったことになる。ここで注意したいのは、『大氷海』と「北氷洋」でいくつかの固有名詞の表記が共通していることである。露伴は、『大氷海』序文で「ノルデンスキョルドの北洋航海は其艦ヴェガの吾が邦に来りしため今猶吾が邦人間に嘖々として称せらるる」と記しており、本文では「アレルト」に「ハイヤス」という表記が見られる。Drew では “Nordenskjöld” とあるため、『大氷海』での表記を踏襲したと思われるが、“Hayes” を「ハイヤス」と表記するのは珍しく、何らかの形で成友が協力していた可能性を示すものであろう。

この「ノルデンスキョルド」が再び登場するのが、「北氷洋」の翌月、1894年1月の『小国民』に掲載された「瑞典国の冬」である。このフィンランド出身ながらスウェーデンで活躍した探検家への関心からだろうか、活躍典拠は、William Widgery Thomas の *Sweden and the Swedes* の14章 “Winter at Stockholm” である[30]。掲載時期にあわせて冬の話を選んだと思わ

29）このことは吉田大輔も、露伴は郡司の事業を北西航路の探索など世界的な海洋開発のなかに位置づけようとしていると指摘している。「北進論文学者としての幸田露伴像の解明へ向けて－実兄・郡司成忠の千島入植との関わりを中心に－」,『世紀転換期の日英における移動と衝突－諜報と教育を中心に』（大阪大学, 2013）を参照。

30）William Widgery Thomas, *Sweden and the Swedes* (Chicago and New York: Rand, McNally, 1891), “Winter at Stockholm”, pp.169-181.

れるが、1号のみで次号に連載されることはなく、短いせいもあって、かなりの原文が省略されている。ただし、『大氷海』や「北氷洋」でも登場した「氷海暗黒」と同じく、冬を「暗黒」になぞらえる冒頭はほぼ忠実に翻訳されている。「スウェーデンの冬」と「瑞典国の冬」の冒頭とをそれぞれ引用する。

> In Sweden the autumn days grow shorter with painful rapidity. All through the fall each succeeding day is five minutes shorter than the day before; the nights grow long apace; the sun sinks lower and lower in the southern skies, till at last he seems about to desert you altogether and leave your world in utter and outer darkness.
> 瑞典は諸子の知る如く欧羅巴北部の国なるが、秋に至れば昼の次第に短くなり行くこと一日に五分ずつにて、太陽は日を追うて南方の空に低く沈み、終に此世は暗黒世界になりもやすると思わるるばかりなり。（10, 318）

以降、スウェーデンの長い冬と、その無聊を慰める娯楽としてスケートやスキーを紹介したあと、「かんじき」のような「スキドル」は行軍にも役に立つとして「北極横航にて有名なるノルデンスキョルド氏は、一千八百八十三年グリーンランド探検の際、二人のラップ人（スキドルに乗るに最も巧みなる人種）を雇い半島の内部に送りたることありしが、二人は五十七時間に二百八十四英里を旅行せり」と続く。これは “Nordenskiöld, in his Greenland expedition of 1883, sent out two Lapps on skidor into the interior of the peninsula. In fifty-seven consecutive hours these ski runners traveled a distance of two hundred and eighty-four miles.”（181）という2文を省略なく訳したものであろう。冒頭での「諸子の知る如く欧羅巴北部の国」といったスウェーデンの説明と同様に、「ラップ人」に注釈を加えているだけでなく、「ノルデンスキョルド」に「北極横航にて有名なる」を付記しているのは、『大氷海』の序文のように、日本に寄港したこともある探検家を省くことなく訳出することで、彼の南下してきた航路を逆に北方へと進み、千島で越冬する郡司たちを意識してのことかもしれない。

露伴のいうノルデンスキョルド、現在でもノルデンショルドまたはノルデンシェルドと表記が揺らいでおり、それだけなじみがなく忘れられた存在であることをうかがわせるが、この探検家の一行が、1879年9月2日に横浜に寄港した際には、官民こぞって熱烈に歓迎したという。興味深いのは新聞にみる報道姿勢で、英字紙が科学的成果を強調するのに対して、邦字紙では多くが国民に「ノルデンスキジョルド」のような進取の気概と奮起を促す論調であったことだ。たとえば9月20付の『東京曙新聞』は、「日本男児モ亦宜ク起テ遠征険発ノ実力ヲ求ムベシ山田長政高田屋嘉兵衛間宮十蔵其人ナキ耶」と、まさに露伴が1893年に「北

氷洋」で悲憤するような嘆きを露わにしている[31)]。このように海外雄飛を奨励し、海事への関心を高めることは、富国強兵の近代日本ではほぼ国是とされていた。それだけに郡司の企図への官民ともに十分な協力がなかったことは、露伴にとって無念だったことだろう。「北氷洋」の前半で展開していたかつての海国日本の多様な経験と文学、それに比しての現今の海事思想の欠如への嘆きは、「海と日本文学と」（1900）で詳述されることになる。この一文は、翌 1901 年には『中等国語読本』に全文が採用されるなど、長く教科書の教材として親しまれることになった。郡司の千島拓殖の時にはロシアへの刺激が懸念されたが、露伴の「海と日本文学と」は、日清戦争と義和団事件を経て、ロシアとの衝突が明確になった時期に、海事思想振興という点で評価されたといってよいだろう[32)]。すでに『いさなとり』（1891）を書いていた露伴も、ただ少国民に悲憤慷慨するだけでなく、彼らを海と船へと誘うような海洋文学執筆の気概を高めたのではないか。たとえば、英語を能くし、広く洋書に目を通していた内田魯庵に宛てた 1903 年 11 月 4 日付の手紙には「Lark Russel というものの海事に関する小説雑書を得度存じ候が」、「何が最佳作たるを知らず候間何卒御指名下され度」と、文献の教示を依頼している[33)]。これは船員経験を生かした多数の海洋小説で人気を博した英国作家 Clark Russel の誤記だろう。郡司成忠が設立した報效義会の竜睡丸が太平洋で遭難し、船長の談話や刊行されたばかりの漂流記などを参考にして、『天うつ浪』の連載を始めたのが 1903 年の 9 月 21 日である[34)]。執筆の参考資料であったことはまず疑いあるまい。なお「北氷洋」の資料であった *English Illustrated Magazine* の 7 月号から 2 か月後、同誌 1893 年 9 月号には、Raymond Blathwayt による “How Mr. Clark Russell Writes His Sea Novels” が掲載されている。露伴がどこでラッセルの名を知ったのか、百にも及ぶ作品群から魯庵が何を推挙したのか、もし露伴が読んだとして、それをどのように小説に利用したのか、疑問は尽きないが、いずれも現段階では不明である。

なお、この *English Illustrated Magazine* は、当時、日本でも英国でもよく読まれていた。一つには、1893 年 6 月号から 9 月号まで、Douglas Fawcett が連載した *Hartmann the Anarchist* が話題を呼んでいたことが挙げられる。その名もアッティラ号という飛行機に乗り込んだアナーキストたちが、ロンドンを爆撃し恐怖に陥れるという空中戦争の先駆けといえる小説である。フン族の王の名アッティラにおそらくドイツの哲学者を参考にしたハート

31）A・E・ノルデンシェルド, 小川たかし訳『ヴェガ号航海誌』下巻（フジ出版社, 1988）, p.450 の訳注 297.

32）詳細は橋本順光・鈴木禎宏編著『欧州航路の文化誌－寄港地を読み解く』（青弓社, 2017）の序章「欧州航路の文学」を参照。

33）幸田文編『露伴の書簡』（弘文堂, 1951）, p.116.

34）柳田泉「「探検実話・竜睡丸漂流記」という本」『柳田泉の文学遺産』第二巻（右文書院, 2009）, p.179.

マンという名が示すように、粉々に破砕されるビッグベンなど、空中からの攻撃に燃え盛るロンドンの挿絵はあからさまに外国からのテロの恐怖を煽っていた[35]。改心したハートマンが自爆することで終結するという幕引きも、地上から攻撃する手立ては何もないことを示唆していよう。一方、ヴェルヌのデビュー作『気球に乗って五週間』（1863）をまつまでもなく、飛ぶことをめぐる冒険と帝国の物語は、日本でもつとに人気であった。この『無政府主義者ハートマン』も、連載と単行本刊行から3年後には『空中軍艦』（1896）と題し、博文館から翻訳されている[36]。ただし、一部設定を日本人へと変更していることからもわかるように、原作とは違ってむしろ英国怖れるに足らずといった人種戦争としての文脈で受容されたことは注記する必要があるだろう。

露伴が参照した "North Pole Up To Date: A Sketch" に向かい合って掲載されていたのが、『無政府主義者ハートマン』である。見開きで、左にはホッキョクグマやセイウチのたたずむ氷の海の挿絵、右には爆発とともにへし折れたビッグベンの頭上を飛行機が進む挿絵となっているので、おそらく露伴もこの強烈な空襲の挿絵を目にしたことだろう。その残響とも思える場面が少年向けの小品「弓太郎」（1895）に登場する。掲載先は『少年世界』7月号で、後に『空中軍艦』（1896）を出版することになる博文館の雑誌である。弓の名手である少年弓太郎が地下にある槐安の国に迷いこみ、その女王から「天船」の襲来に悩んでいることを聞く。敵の木末国の兵士が一人一人飛行機のような「天船」に乗っているところは別としても、「敵の大将鐵嘴王は大天船に乗りて虚空を縦横に飛行なし、脱漏無く此所を打て彼所を衝け罵り励ま」す様子は、アッティラ号からの空爆を思わせる（10, 360）。ただし、そこは弓太郎で、失敗にもへこたれず、見事、敵王を射抜き、物語は大団円を迎えるのである。

このように人類の飛行が楽天的な未来を象徴するだけではなく、戦争にとって有効な手段になることを露伴は、『無政府主義者ハートマン』から感知していたと思しい。「瑞典国の冬」から2ヶ月後、1894年3月から4月にかけて『小国民』に掲載された「風船旅行」にも、そんな反響を聞き取ることができる。一見、ヴェルヌ風の漫遊記のようであるが、これは気球が戦争で活躍した最初期のエピソードの実録にほかならない。普仏戦争中の1870年、包囲されたパリから気球で脱出し、海を越えてノルウェーにまで不時着したものの、無事に伝令を届けたポール・ロリア（Paul Rolier）という技師がおり、その武勇伝を紹介したものである。これは、おおむねアメリカの雑誌 *Chatterbox* の1874年21号および22号に掲載されたJ.F.C.の "Paris to Norway in Fourteen Hours: A Balloon Voyage during the Siege of Paris" の翻訳といってよい。「余りに冗長ならんことを怕るれば、以下は梗概を記載すべし」

35）詳しくはYorimitsu Hashimoto, "Victorian Biological Terror: A Study of "The Stolen Bacillus"", *The Undying Fire: The Journal of the H.G. Wells Society, the Americas* (2), 2003を参照。

36）横田順彌『近代日本奇想小説史』（ピラールプレス, 2011）, pp.439-446.

（10, 349）という断り書きまで、“We must now abridge the story of our travellers, which enters too much into minute particulars.” という原文の翻訳だが、後半は、特に救出された後の声明などで省略がままみられる[37]。露伴が再録された資料を見た可能性は否定できないが、今のところそれらしい書籍は未確認であり、20 年前の 1874 年の雑誌を引っ張り出してきたのは、『無政府主義者ハートマン』に感化されてのことなのではないか。以下、それぞれの冒頭を引用する。

> Not the least interesting among the many exciting incidents of the Franco-Prussian war, were the marvelous adventures and hair-breadth escapes of the bold aeronauts who tried, at the risk of their lives, to carry letters and despatches from Paris to the provinces of France. But of all these wonderful journeys through the air by far the most marvelous was that accomplished by the balloon ‘La Ville d’Orléans,’ which left Paris on 24th November, 1870, bearing important despatches from General Trochu to the army of the Loire. Violent winds wafted it in fourteen hours to Norway. The extraordinary adventure of this voyage, though perfectly true, seems like a story out of the *Arabian Nights*. The following narrative addressed by a soldier, who was one of the party, to his commander, and published in a French newspaper at the time, gives a graphic account of this adventurous journey. (166)
> 普漏西と仏蘭西との戦争中、人の耳目を聳動するに足し逸事の伝わりしもの少からねど、中に就て白眉とすべきは、風船に乗じて城内より城外の味方に音信を通じたるの一事なるべし。特に其空中旅行の中にも、千八百七十年十一月二十四日。トロシュー将軍の命をロアーに在る我軍に伝えんとして巴里を出発せし「デビル、ドレアンス」（風船の名）の、十四時間にして天涯遥なる諾威国に吹き着けられたる旅行の如きは、最も驚異すべきものにして、「アラビヤン、ナイト」（荒唐の談を記せる有名の書）にもあるべきものなり。次に記すは該風船に乗り込める一兵卒の説話にて、文中予とあるは該兵卒のことと知るべし。（10, 341）

フランス語の固有名詞を英語読みせず、比較的原音に沿って表記していることから、成友に協力を得たのかもしれない。気球の名前が「ラ・ヴィル」ではなく「デビル」となっているのは、「ラ」の誤記か誤植であろう。最後の一文で「予」は兵卒のことという補記のほかは、

37）J.F.C., “Paris to Norway in Fourteen Hours: A Balloon Voyage during the Siege of Paris”, *Chatterbox*, 1874, p.175.

ほぼ正確な翻訳であることがわかる。『アラビアン・ナイト』を引き合いに出しているのは、巨大な怪鳥ロックの足にしがみつき、島に漂着したシンドバッドの冒険に匹敵するということなのだろう。その含意を説明しないのであれば、省略してもよさそうだが、すでに日本でも翻訳などで読まれるようになっていた背景をふまえてか、そのまま翻訳している。言葉も勝手もわからない異国に漂着したものの、身振り手振りで意思を伝え、無事に任務と帰還を果たしたロリアの冒険は、たしかに現代版シンドバッドの趣きがある。実際、生還の当時から話題になっており、たとえば、フランスきっての名編集者として知られるエルツェルがヴェルヌに宛てた書簡によれば、このロリアの手記をエルツェルはヴェルヌに送っており、ヴェルヌが序文を寄せて刊行する話まであったという[38)]。企画は実現しなかったようだが、ヴェルヌはこれを『神秘の島』（1874）に応用したといわれる。南北戦争で拠点のリッチモンドを北軍に包囲された際、気球を奪って北軍の捕虜が脱出し、海を越えて無人島に不時着するという冒頭は、シンドバッドならぬロリアの手記をたしかに着想源としたと考えていいだろう。『神秘の島』は、『入雲異譚』と題した森田思軒による翻訳が、博文館発行の競合誌『日本之少年』で1893年の6月号から連載されていた[39)]。1894年12月まで続いたというので、「風船旅行」とそれを発展させた小説が、ちょうど同時期の少年雑誌に掲載されていたことになる。

そもそも気球の軍事的な側面が注目されたのは普仏戦争からだった。気球が伝令の代わりに使われ、たとえばピュヴィス・ド・シャヴァンヌは、抵抗と希望の象徴として「気球」（Le Ballon, 1870）という油彩画を描いている。特に脚光を浴びたのは、1870年10月に政治家のレオン・ガンベッタが気球に乗って脱出し、臨時政府首班となってからである。そのころプロシア側で戦況を視察していた大山巌は、普仏戦争での見聞をもとに西南戦争で軍事気球を使用したという[40)]。それゆえガンベッタの脱出行は明治の日本でもよく知られており、東海散士の『佳人之奇遇』（1886）には、雪辱を誓う巌公ことガンベッタの言葉が登場するという[41)]。ロリアが機密文書を気球で運んだしたのも、この臨時政府に届けるためであり、ガンベッタの脱出からおよそ1ヶ月後のことだった。ガンベッタに比して、当時の日本ではロリアの脱出行がほとんど知られておらず、名だたる政治家ではなく一介の技師が創意と胆力でもって大きな使命を果たすところに、『五重塔』（1893）を書いた露伴はいたく共感したのではないか。そしてこの「風船旅行」もまた、北方への冒険という『大氷洋』以来の主題に連なっている。上空で「飢寒」に苦しみ、不時着したノルウェーでは見ず知らずの「農夫」

38）Jule Verne, *The Mysterious Island* (Middletown: Wesleyan University Press, 2013), pp.637-638, n.5.
39）川戸道昭・榊原貴教編『明治翻訳文学全集 ヴェルヌ集II』（ナダ出版センター, 1997）, p.406.
40）竹内正虎『日本航空発達史』（相模書房, 1940）, pp.248-249 および和田博文『飛行の夢－1783－1945』（藤原書店, 2005）, pp.31-33.
41）和田博文『飛行の夢－1783－1945』p.42.

に助けられ、雪の中を苦労して進むなど、これまでの「小国民」に掲載した「陰徳陽報」、「北氷洋」、「瑞典国の冬」の主題がみな繰り返されているといえるのである。

4　英語文献の転用

「風船旅行」以降、露伴の著作からは過半が英語文献からの翻訳という事例は、ほとんど見られなくなっていく。代わりに英語の文献を参照ないし言及する著作が増え、翻訳している場合にしても、省略や編集を加えていることが多くなる。桂英子という署名で、『新小説』に寄せた「露国の滑稽作者」（1897）は、『小国民』掲載の「瑞典国の冬」に似て、かなり原文を省略した紹介になっているが、最大の相違点は「ユーモア、オフ、ルシヤに拠る」とまがりなりにも原典を明記していることである。露伴はこれを『讕言』（1901）に収録して、自作としたが、出典などについてはこれ以上触れられてはいない。典拠は、E.L. Voynichが翻訳した *The Humour of Russia*（1895）所収のS. Stepniakによる序文である[42)]。ただし、「拠る」というだけあって、原文を自在に取捨選択し、わかりやすく説明や言葉を補っており、かなり原文とは異なったものとなっている。まず英語の序文の第一段落を引こう。

> Of all manifestations of literary genius humour is the rarest, and I am not sure that it is not the highest. Laughter is immortal. The sentimental novels over which our grandfathers and grandmothers shed floods of tears--the “Corinnas”, the “Clarissas” and the “New Heloises”--have become for us soporifics of an almost irresistible strength. But the world still laughs, and will laugh for ever, over the masterpiece of Cervantes and the burlesques of Voltaire. Who nowadays can read from beginning to end Francesco Petrarca, and who can put down Giovanni Boccaccio when once begun? (ix)

文学において滑稽こそ得難く、むしろ最上の価値を持ちうるのではないかと問いかけ、笑いこそ不死の存在であることを根拠に挙げている。かつて祖父母の世代が感涙した感傷小説などもはや無用の長物でしかないのに比べ、セルバンテス、ヴォルテール、ボッカチオなど、滑稽な小説はいまなお愛されているというのである。前提となっているのは、アリストテレスの『詩学』以来の悲劇優越論であり、そこへ祖父母が感傷小説を読んで大量の涙を流したこと、最初から最後までペトラルカを読むことといった表現を使うことで、いわばユーモア

42）S. Stepniak, Introduction, E.L. Voynich (ed), *The Humour of Russia* (London: Walter Scott, 1895).

をこめた喜劇優越論となっている。

この一段落に対して、露伴は陳腐な例として挙がっている感傷小説の具体的な書名をすべて削除する一方で、東西から豊富な事例を引き、説明を書き込み、およそ5倍以上の長さにまでふくらませている。以下、その前半のみを引いてみよう。

> 才もまた多し、文もまた多し。されど古来才人の文章、事を叙して温潤藻麗なるもの、情を叙して矯健痛快なるもの、或は功夫苦到せる小説、或は情理傑特の悲劇等のもの少なからざるに関らず、内は敦厚にして外は詼諧、理は真実にして辞は滑流なる滑稽の佳汁に至っては、各国甚だ乏し。人或は滑稽は文学の上乗なる者にあらずと謂う、然れども是昧者の妄言のみ、決して達人の至論にあらず。蓋し人の心海春風忽として至って、而して莞爾と含笑し輾然と発笑するや、古今態を同じくし呉越も時を一にす。此一笑千歳泯びず万里よく伝う。（24, 282）

英語ではわずか1行半の2つしかない文章を、これほどの名調子で展開してみせるのは露伴ならではだろう。悲劇優越論や擬英雄詩（mock-heroic）という前提を共有しないため、冒頭の一文を追加することでいったんは多様性を認めつつ、しかし悲劇が多いのに比べて、喜劇は少ないと注記し、その価値を強調している手並みは鮮やかというほかない。二重否定の原文が示唆するのみで明示していない「喜劇は二流で悲劇こそ一流」という通説を紹介して、足下に否定し、「笑いは不死身」という短い一文を、時間と空間をそれぞれ超える事例を書き加え、「呉越」という「同舟」を連想させる事例をむしろ積極的な意味で使用している。そしてさらに「笑いは不死身」という原文の簡潔さを生かし、笑いは「千歳泯びず万里よく伝う」という見事な意訳を披露するのである。露伴はさらに「センチメンタル、ノベル」は陳腐と具体例には一切触れず、ボッカチオを「一度読みだすと辞められない」という表現を生かして、セルバンテスとヴォルテールは「今尚人をして覚えず開口縮鼻して其妙趣を感ぜしむる」と記している。ボッカチオについてはまったく触れず、そのためセルバンテスをイタリアの作家と誤解しているのはご愛敬だが、この滑稽文学の雄は、「マンゾニー」（Manzoni）に勝るとも劣らないとし、「中正の語」ではなく「ミランの方言」を用いた「カルロポルタ」（Carlo Porta）は惜しまれると、このあたりはほぼ原文を踏襲している。特記すべきなのは、イタリアの方言の多様性から連想したのだろう、それは「例えば馬琴種彦等の文の如くならずして、仙台方言を以て原文一致体に綴れるが如し」と注記してみせるところである。『新小説』への掲載ということもあってか、固有名詞にかなりの注意と配慮が払われており、「アラビヤン、ナイト」とそのまま翻訳しただけの「風船旅行」の冒頭とは、ほぼ同時期の著作ながらまったく異なった方法で書かれているといえよう。

以降の段落でも原文の固有名詞や説明を自在に編集し、巧みに東洋の例を織り込みつつ、ロシアの作家紹介が続く。英訳されたのは初めてといった無駄な情報を省き、原文の序論をかなり圧縮しながらも、収録の作家や作品は露伴の好みで自由に取捨選択されている。しかも、ただ序文の講評や解説を引き写しているわけではない。おそらく収録されている作品についても、いくつかはざっとであれ目を通したのだろう、自身の批評もその文章に盛り込んでいるのである。たとえば末尾の紹介とそれに対応する原文を引用してみよう。

> 陰鬱悲惨の作者ドストエフスキー亦滑稽の作なきにあらず。「鰮魚」の一篇即ち是なり。才人の才、意の到るところ便ち妙境を現ずというべく、人鰮魚の貴きを知って人の貴きを知らざるの笑話を叙す。理外の事、法外の事、真に意表に出で最も奇怪を極む。上乗のものにあらずと雖も一読の値なしというべからず。（24, 286）
>
> The gloomy author of *Crime and Punishment* once relieved his mind with a queer, semi-fantastic little story, “The Crocodile,” which amuses by its incongruities and contrasts. It has not been before translated, so far as I know, into any foreign language, and the English admirers of Dostoyèvsky will be the first to read it.(xv)

原文の方は、奇妙で不可解の小説とは記しているが、内容の詳細は記さず、初めての外国語訳であるらしいことを付記するのみである。本書が収録する「鰐」の英訳の冒頭には、鰐に生きたまま丸呑みされた男の物語という旨のわずかな説明があり、おそらく露伴は、これを読んだのだろう。鰐の体内で生活を始める男というドストエフスキーの有名なナンセンス小説について、露伴がどこまで読み込んだのかは不明であるが、初めての英訳から 2 年後という比較的早い時期に露伴が「鰐」に接していたことになる。森鴎外が「鰐」と題して翻訳するのは 1912 年なので、その 15 年前のことである。柳田泉は、露伴が独自に咀嚼した西洋の作家として、ニーチェとドストエフスキーを特筆し、「露伴の近代文学におけるあり方を語るとき忘れてはならぬファクタアであるのに、案外無視されているところがある」と苦言を呈したが、少なくとも「鰐」という不可思議な小説は先に英語で知っていたことになる[43)]。鴎外の「鰐」を読んだのかどうかは不明ながら、日本語であれ、英語であれ、こうした西洋文学の摂取と咀嚼については、依然としてしかるべき作業が必要だろう。

とはいえ、「露国の滑稽作者」以降、露伴が英語の文献を利用するのは、博物学や心霊研究に関する随筆が主なものとなり、言及も断片的になっていく。それは一種「方陣秘説」への回帰といえるだろうが、東西交渉の歴史の考証という過去への関心が中心になっている点

43）柳田泉「近代文学における露伴の位置」『柳田泉の文学遺産』第二巻（右文書院, 2009）, p.147.

で両者は大いに異なっている。そんな東西にまたがる考証随筆への転換点ともいえる代表的な例が、雑誌『太陽』に連載された「将棋雑考」（1900）であろう。西洋将棋、支那将棋、日本将棋の3章から成り、それぞれの沿革と歴史をたどり、それらがつまるところインドの「ちゃつらんが」（Chaturanga）という共通の起源をもつと提唱したのである。西洋のチェスがインドのチャトランガに由来するとは、古くから主張されてきたが、露伴の独創は、それらの文献を利用して、チャトランガと中国の将棋を比較することで、駒の機能が共通していることを指摘したところであろう。つまり、チェスと将棋を比較していては目に入らない移入の歴史を、インドに注目することで明確にしたのである。これはH. J. R. Murrayの定評ある*A History of Chess*（1913）に先んじた主張でもある。

そのために西洋将棋の歴史を概観し、インド起源説を紹介する必要があったのだが、この西洋将棋の章のほとんどは、露伴が愛読していたと家族も証言していた『ブリタニカ百科事典』の引き写しであった。執筆当時の最新版だった*Encyclopædia Britannica*, 9th edition から、Chessの下位項目の "Various Theories as to the Invention of Chess" を適宜、縮約したものである[44)]。たしかに出典を書かず、ただ「西洋諸国の将棋に関する考説を瞥見するに凡そ左の如し」（19, 1）と始め、14ページに渡って翻訳を掲載し、「西洋将棋の大概是の如し」（19, 14）と章のほとんどを紹介で終わってしまうのは、たとえ「後に支那日本の将棋を説くに当って参照すべきところ少なからざる」（19, 14）ゆえとはいえ、当時においても破格であったろう。ところどころ解説を交え、特に中国については、「将棋は支那に濫觴すとの説は、ろーやる、あいりっし、あかでみい事務局にて出板せられたる西暦一千七百九十三年あいるす、あるゐん氏がちゃるもんと伯に与えたるの書に見ゆ」[45)]という記述に続く、不確かな表記に対応する漢字を推定している。"chon-ki" は「将棋」だとしても、"Lin Pang" に献上した "Hansing" というのは、「劉邦」と「韓信」だろうかと類推するものの、こんな韓信将棋発明説はおよそ時代もあわず、噴飯ものでしかないと批判するのである。もちろん、こうした中国や日本に対する不確かな記述は、同時に露伴には好都合であったことはいうまでもない。西洋の文献にみる和書や漢籍に関する無理解を肴に傾ける蘊蓄、あるいはそれを逆手にとって、英語の文献によってインドのことを調べ、そこからインドと中国の関係に注目するという考証は、以降の露伴の随筆で幾度も繰り返されることになる。

もちろん、かつての「小国民」に掲載していたような読み物も書かれてはいた。修養に関

44）*Encyclopædia Britannica*, 9th edition (New York: Charles Scribner's sons, 1878), volume 5, pp.596-600.

45）対応する原文は以下の通り。*Encyclopædia Britannica*, 9th edition, p.597, "The claims of the Chinese were advocated in a letter addressed by Mr Eyles Irwin in 1793 to the Earl Charlemont. This paper was published in the *Transactions of the Royal Irish Academy*".

する著作、特に『努力論』（1912）などには、英米の雑誌記事や『ブリタニカ百科事典』から取り入れたような豆知識やトリヴィアをちりばめている。それらはおおむね複数の典拠や資料を使っており、露伴のほかの著作と関連するものも多い。その中で注目すべきは『立志立功』（1915）に収録された「鉄の物語」であろう。露伴の最初期の少年文学が「鉄三鍛」（1890）であり、その冒頭の詩で「赤裸百貫の生金」が練られて打たれて「宝剣」になるというように（10, 229）、心身の成長を鉄の比喩で語る露伴は、金属の錬成に早くから並々ならぬ関心を抱いていた。それは心身の鍛錬という修養に関連すると同時に、道教などの錬金術についての研究とも地続きであった。「鉄の物語」は、『立志立功』に収録されてはいるものの、中身は製鉄の歴史といえるものであり、露伴が金属の精錬にいかに関心が高かったかがうかがえる。たとえば露伴の『文明の庫』（1898）で由来が語られる主題が陶器、紙、銃器、そして仮名であることと対比すればそれは明らかになるだろう。『文明の庫』の場合は、いずれも西洋に先んじて中国で発明されたものか、それにちなむものばかりといえるからである。しかし、「鉄の物語」にあるように、製鉄については西洋の最新の技術にも露伴は積極的に筆を進め、知識の摂取に努めている。

この「鉄の物語」は、序文によれば1909年に執筆したとある。『小国民』のように一つの資料に全面的に依拠するのではなく、かといって百科事典をそのまま引き写すことはしていない。たしかに多くがJohn Yeatsの *The Technical History of Commerce, or, the Progress of the Useful Arts*（1887）に依拠していることについてはすでに指摘がある[46]。しかし、1887年以降の技術をはじめ、複数の資料を使ったと思われる記述が多く、たとえば「ベスマア」（Bessemer）以降に改良を加えた「トーマスだのギルクリストだのスニーラスだの」（Thomas, Gilchrist, Snelus）は、ブリタニカ百科事典あたりから得た可能性が高い（10, 452）。理由の一つが、「ベスマアの外に又一豪傑が現れて、又異なった製鋼法を工夫した」として、「それは誰かというと即ちシーメンス、マルチン」という記述である（10, 453）。これはブリタニカなどで“The Siemens-martin Process”とあるのを、二人の名からとった方法と知らずに、これで一人の人名と誤解したからであろう。ただし、ブリタニカにはない記述もあるため、即断はできず、現段階では複数の書籍を見たと考えるしかあるまい。

こうした心身の錬成への関心から、積極的に西洋の文献にあたったと思われるのが、心霊に関する研究である。柳田泉が記録した露伴の旧蔵書には、忽滑谷快天と門脇探玄訳のアディントン・ブルース『心霊の謎』（1911）とP. Pavriの *Theosophy Explained in Questions and Answers*（1921）というどちらも広義の霊媒に関係した書物がある[47]。露伴が「支那に

46）詳しくは吉田大輔「幸田露伴の少年文学「鐵の物語」の英語典拠」『京都造形芸術大学紀要』21,（2017）を参照。

47）柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記」（1966），日本文学研究資料刊行会編『幸田露伴・樋口一葉』（有精堂

おける霊的現象」（1917）で、中国の怪異現象を説明したあと、「丁度西洋の交霊術で、霊媒クック嬢にケティ・キングの霊が現われ、パイパー夫人にフィヌイットが現われ、ステーントン・モーゼスにインペラトールが現れた類である」（15, 375）とあるのは、多分に『心霊の謎』をふまえるものだろう。ただし、これも複数の資料を参照したと思われる。たしかに Florence Cook と Katie King は有名ながら、『心霊の謎』に登場せず、ほかの名前も表記が異なるからである。ただ『心霊の謎』には原綴が頁の上部に記されており、それを露伴が自己流に読んだ可能性も否定はできない。順にいえば、「パイパー夫人」（133）（Piper）、「フィニュー」（Phinuit）（134）、「ステイントン、モセス」（Stainton Moses）（140）、「インペレトール」（Imperator）（140）である。重要なのは、こうした欧米の心霊研究を読むことで、いままで単に怪異現象とされてきた中国の事例を、交霊術として発見し、光をあてたところであろう。中国の事例を説明した後、西洋でいうところの交霊術はこれにすぎないと露伴は示唆するのだが、語るに落ちるというべきか、かえって西洋の交霊術の影響を認めてしまっているともいえる。

はっきりと馬脚を露わにしてしまっているのが、「聊斎志異とシカゴエキザミナーと魔法」（1926）である。いわばインドの魔術をめぐる東西の対決といえるだろう。老人が縄を投げるや、それは空中へと昇っていき、それを少年もよじ登っていく。すると、少年は切り刻まれて観客は騒ぎだす。すると、まもなく、少年は無事に生き返って現れるというものである。これはインディアン・ロープ・マジックともいわれ、実現が可能なのか、そもそもどこで見ることができるのか、欧米を中心に 19 世紀末から幾度となく新聞や雑誌などで話題になっていた。その正体を知ろうと、或る人がカメラで撮影したところ、何も写っておらず、人々は集団催眠にかかっていたことが判明したという。ここまで記した露伴は、以下のようにまとめている。

> こういうことを今より幾年か前のシカゴエキザミナーは書いたのである。で、それは科学的機械の写真機と神怪な魔術の接触ということで特に人々に興味を惹かせた為でもあろう、心霊現象に研究心を持って居るコリントンという者なぞは、果して然様いうことが事実行われるものか何様かと、印度に長く居た人々に問糺しなどしたということを記している。（15, 485）

このコリントンというのは、Hereward Carrington のことで、このことは *Higher Psychical Development (Yoga philosophy): an Outline of the Secret Hindu Teachings*（1920）に記さ

出版, 1982), p.105, p.107.

れている。以下、該当箇所を引用しよう。

> That is the story, which is certainly staggering enough! When first published, it was backed-up or supported by a series of photographs which were published in the *Chicago Examiner* years ago, and it was claimed that the whole thing was the result of hypnotism, --that when the camera was exposed, "which cannot be hypnotized" (as the audience was supposed to be), it showed that nothing of the sort took place. But the so-called "photographs" produced to back-up this story of collective hypnotism proved to be *woodcuts*, and not photographs at all, --so that the whole incident was a newspaper trick, -- a newspaper story, --and the problem of that rope trick still remains, --whether it has really ever been performed or not. I have spoken to very many people who have lived years in India, who have tried to see this feat performed and were never able to do so; and I doubt very much whether it has ever been shown. If so, there is possibly some basis of hypnotic "glamour" in it; but it is exceedingly doubtful whether the trick, as described, has ever been shown in India, though various simpler modifications of it can certainly be seen.[48)]

キャリントンによれば、写真には何も写っていないと報道した記事自体、写真ではなく挿絵で説明しており、実はその撮影したという記事自体が捏造だったというのである。実際、インドまで見に出かけたものの見られなかった人は多く、そのためこの魔術が本当に行われたのかどうか疑わしくなってきたとも記している。事実、この記事は写真ではなく木版画を掲載している。ただし、意図的なのかどうか、キャリントンは新聞の名を誤記しており、そのような捏造記事を載せたのは実はシカゴ・トリビューンである。つまり、シカゴエキザミナーと書いている露伴は、キャリントンしか読んでおらず、しかもその主張を歪曲していることになる。さらに露伴は、こうした魔術ならすでに『聊斎志異』に書かれているとして、「写真機を向けるというところが如何にも西洋らしいヨタで好い」と結んでいる。しかし、露伴は知らなかったであろうが、1880年の『聊斎志異』の英訳により、その中にインディアン・ロープ・マジックが記録されていることが報告され、ますます関心が高まるなかで1890年に売上を目的として捏造記事が書かれたのであった[49)]。

---

48) Hereward Carrington, *Higher Psychical Development (Yoga philosophy): an Outline of the Secret Hindu Teachings* (New York : Dodd, Mead, 1920), p.192.

49) 一部の指摘が重なるが、詳細は拙稿「インディアン・ロープ・マジック幻想 ―幸田露伴から手塚治虫まで」一柳廣孝監修『怪異を魅せる』（青弓社 , 2016）を参照。広義の心霊やヨガ研究でもよく言

キャリントンの文献の場合は、意図的な矮小化といえるが、『聊斎志異』の例のように文献を参照しなかったため意図せずして、旧知の事実を発見と誤解した事例もある。東方朔の作ともいわれる「神異経」に、マンモスについての言い伝えを記した記録があることを報告した「東方朔とマンモッス」（1925）がそれである。ロシアでの調査を報告した満洲人トゥリシェンの『異域録』に、「麻門蠹窪」という記述があり、これは現地の人々が伝えるマンモスにほかならず、同じことを「神異経」では「磎鼠」と記していると伝えている。「失真の言有りと雖も、支那の文献も亦富めりというべし」と露伴は結ぶが、このことは実は欧米では古くからよく知られていた。これは欧米の文献に詳しい南方熊楠も知らなかったようで、露伴によりも 16 年前に、「マンモスに関する旧説」（1909）でほぼ同じ指摘を熊楠もくりかえしている。地政学上の関心から、トゥリシェンの『異域録』は早くも 1821 年には翻訳されており、中国でマンモスが記録され、しかもそれが巨大な鼠と考えられていたというのは、19 世紀の博物学の書物にしばしば登場する逸話であった[50]。それを広く知らしめた一人こそが、『大氷海』以来、露伴が何度も言及していた「ノルデンスキョルド」の航海記だったのである[51]。

「欧亜に跨る狼」（1925）も、同じような例といえるかもしれない。ローマを建国したロムルスが狼に育てられたという伝説と、ジンギスカンの祖先が「蒼狼」という意味の名であることに注目し、突厥が両者を媒介した可能性を示唆した論考である。「欧亜に跨る狼」と

及されており、忽滑谷快天『錬心術』（忠誠堂, 1926）, pp.99-100 にも「幻縄術」として登場する。なお今村与志雄訳『唐宋伝奇集』下（岩波書店 , 1988）, p.307 の注によれば、唐の「嘉興縄技」が、該当する『聊斎志異』の「偸桃」の原話だろうとすでに指摘されているという。そしてこのシカゴの新聞の捏造記事に着想を得た短編に、Burton Harcourt の “Mahatma Magic”（1921）がある。その横溝正史訳ハーコート「マハトマの魔術」は、露伴が書く一年前の『新青年』1925 年 6 月号に掲載されていた。ロープマジックが可能かどうかマハトマと賭けた男、案内された部屋でマジックは成功するが、男は、実は映写機を仕掛けていて、見てみると何もないので催眠術と判明する。これで賭けに勝ったと男が思った瞬間、同じ術を使ってマハトマは消滅してしまうというものである。

50）George Thomas Staunton 翻訳の *Narrative of the Chinese Embassy to the Khan of the Tourgouth Tartars* (London: John Murray, 1821), p.71 によれば、外国では “Ma-men-tou va”、中国では “Kee-shoo” というと紹介があり、訳注で鼠のことも触れられている。翻訳者は、1793 年にマカートニーの中国使節に 12 歳で同行し、後に中国学者となったストーントンである。中国では、マンモスが地下を潜る巨大な鼠と考えられていたという逸話は、たとえば、Sir Edward Burnett Tylor, *Researches Into the Early History of Mankind and the Development of Civilization* (1878), Henry H. Howorth, *The Mammoth and the Flood* (1887), H. N. Hutchinson, *Extinct Monsters* (1892) などに登場する。

51）A・E・ノルデンシェルド , 小川たかし訳『ヴェガ号航海誌』上巻（フジ出版社 , 1988）, p.389. こうした基本的な知識の欠如を、露伴は「晋の僧法顕南アメリカに至る？　日本に来る？」（1929）でも露呈させており、京都帝大文学部の元同僚である桑原隲蔵にあてこすられている。詳しくは稲賀繁美編著『映しと移ろい』（花鳥社, 2019）所収の拙稿「東洋人アメリカ発見説とその転生」を参照。

いう題名は、オオカミを英語でEurasian Wolfと呼びならわすことから着想を得たのかもしれない。文字通り、ユーラシア大陸を往来するだけでなく、草原の王という文化的な象徴としても欧亜にまたがっているということなのだろう。露伴は、1924年に「不児罕山」を始めとするジンギスカン誕生をめぐる戯曲を書いており、調査のなかで狼や鹿を祖先とみなすモンゴルの伝説に注目したのだろう。露伴らしく『元朝秘史』から田中萃一郎が訳したドーソンの『蒙古史』（1909）まで、各種資料を集めて「虚妄と作為」を避けつつ、「大豪傑成吉思汗の誕生に至るまでの事情を幻燈映画的に映出せんと企てた」（32, 43）ものの、「不児罕山」から「怪傑誕生」までの4つの戯曲は、さして成功することはなかった。興味深いのは単行本に収録された際の「龍姿蛇姿序」（1927）という序文である。それによれば、「近頃古人の事跡を描くに、甚だしい空疎の想像と低卑の批判とを加えて、誣妄媟慢の限りを敢てし、徳川時代浄瑠璃作者の為せる所に倣いて自ら疚しとせず、口を芸術の自由に藉りて、実在したる人の実名に被らするに、夢にも存せぬ事相と心術とを賦与するの傾向ある」のが筆をとったきっかけらしい。これは明らかに小谷部全一郎の『成吉思汗ハ源義経也』（1924）の流行を指してのことであろう。露伴の憤りにもかかわらず、1928年にはソヴィエトのプロパガンダ映画『アジアの嵐』が公開され、小谷部のベストセラーを意識した日本版の演劇が1931年に上演されるなど、「幻燈映画的」に成功したのはむしろ「空疎の想像」の方であった[52)]。

一方、露伴がロムルスの伝説を知ったのは、『プルターク英雄伝』を通してであった。「欧亜に跨る狼」が1925年2月であり、高橋五郎による翻訳『プルターク英雄伝』は同年の夏から刊行を開始なので、露伴は自ら英語版に目を通したのだろう。その後「プルターク英雄伝と史記」を同5月に書いているのは、その時、ロムルス伝のために英語版に目を通した副産物かと思われる。おそらくはA. H. Cloughが編集した1875年刊行の英訳だろう。「プルターク英雄伝と史記」の冒頭で、「天下一切の書籍皆銷滅し去るべくして其中只一部の書の保存を允さるべしとしたらば、予はプルターク英雄伝を取る」（25, 500）といった「セオドラス・ガザ」（Theodorus Gaza）の故事という、あまり他の版には見られない逸話が引用されているからである[53)]。したがって、プルタークを称賛したユスティニアヌス帝時代の「碩学アガテアス」とあるのは、この逸話の直後にあるAgathiasのことだろう。この一文が縁となって、

52）詳しくは拙稿「義経＝ジンギスカン説の輸出と逆輸入－黄禍と興亜のあいだで」河野至恩・村井則子編『日本文学の翻訳と流通』（勉誠出版，2018）を参照。なお露伴の試みは井上靖に引きつがれることになる。

53）該当箇所はA. H. Clough, *Plutarch's Lives*, vol.1 (Boston: Little Brown, 1875), xxxviiiにある“if learning must suffer a general shipwreck, and he had only his choice left him of preserving one author, who should be the man he would preserve, he answered Plutarch.”

高橋五郎の翻訳についての「プルターク英雄伝概言」が同年夏、さらに巻ごとに評言を付した「プルターク英雄伝鼇頭評」が同年夏から1927年5月まで続いたと思われる。しかし、露伴は、「欧亜に跨る狼」の問題をこれ以上展開することはなかった。「閑窓偶筆」のほかの随筆と違って、「欧亜に跨る狼」だけは単行本にも収録されなかった。「プルターク英雄伝鼇頭評」での「ロミュラス伝」についても「東洋伝説に此と甚だ似たる者あり」と記すのみで（40, 574）、ジンギスカンにも何ら言及することはなかったのである。どこかでかつて京都帝大で同僚だった内藤湖南に「蒙古開国の伝説」（1913）という似通った論文があることを知ったのかどうか、理由は知る由もない。いずれにせよ「欧亜を跨る狼」のような主題には強く引き付けられつつも、「将棋雑考」の時に比べて、それを物語でも考証でも十分に展開できず、十分な評価も得られなかったことは露伴にとって苦々しい経験であったに違いない。

とはいえ、東西交渉の考証に露伴が関心を継続していたことは疑いない。柳田泉の記録する蔵書にも中央アジアについての文献は多く、ヘディンの *Overland to India*（1910）やHirthとRockhillによる諸蕃志英訳（1911）、Bretschneiderの *Mediaeval researches from Eastern Asiatic Sources*（1888）そして *Sino Iranica*（1919）などはいずれもそうした関心を示しており、アラビア語、ヒンディー語、サンスクリット語の辞書類は、魔方陣や将棋の考証で示した事物の変転を言語でも裏付けたい現れだろう。その一端は、晩年の『蝸牛庵聯話』（1943）で弁財天がインドからどのように入りこみ、変化していったかについて論じた「弁才天女」からもうかがえる。そのなかで特に興味をもっていた読んでいたのは、アメリカの中国学者ベルトルト・ラウファーの研究であったようだ。特に「「玉」の書」（31, 339）に感心したというのは、*Jade: A Study in Chinese Archaeology and Religion*（1912）を指すのだろう。その「苜蓿」（1943）という随筆で、露伴は蔵書目録にもある *Sino Iranica* を詳しく紹介し、ペルシャと中国との豊富な事物の交通に強い関心を見せている。その業績と学識に感服する一方で、露伴はラウファーに疑問を呈している。ラウファーは、苜蓿ことアルファルファは仏典に記載があるという『本草綱目』を誤りだと指摘する（31, 340-342）。それに対して、これはあくまで物ではなく単語として記載があると断っているので、誤りとはいえないと露伴は考えたのである。ここで露伴が紹介するのは *Sino Iranica* にある通りであり、600ページを超える浩瀚な書物から矛盾を見つけだすのは、それだけ細かく目を通していたということでもあるだろう。ただし、この露伴の反論が、どのような反響を引き起こしたのかは十分にわかってはいない。

「将棋雑考」以来の英語文献を使用した大きな業績としては、「仙書参同契」（1941）が挙げられるだろう。製鉄や錬成について古くから文献を調べてきた露伴が、錬金術に深入りするのも当然のことだったかもしれない。「鉄三鍛」が、心身の錬成を鉄の比喩で記していたように、露伴の錬金術への関心も、鉱物もさりながら、心身のこととしてとらえるところに

理由があったように思われる。「仙書参同契」の末尾でも、丹道で重要な地位にある「泥丸」は、「文字によって写された印度の語ニルヴァ―ナを写した文字」ではないかと、唐突にインドとの交通を強調するところがある（18, 483）。これは以下に引用するように、道教とヨガの共通点を指摘する結論の伏線になっている。

> 参同契の窮極のところは、甚だ瑜伽の道に似ている。今伝わっているヨガの道法では、ムーラーダハーラ即ち参同契の謂う所の真鉛を熟練して、サハスラーラ即ち参同契謂うところの真汞にまで昇到せしむる。（中略）ヨガでは六つのチャクラ即ち蔵を説き（中略）、脊髄中を次第に昇るとして説いている。そして其の修煉の方法順序は互に同異があり、参同契は先天後天、易五行の説を仮りて説いているが、ヨガは象だの、摩竭魚だの、印度の神々だのを象徴的に用いるというよりは殆ど信仰的に説いて、其の透関の始終を明かしている。（18, 490）

つまり、中国の参同契もインドのヨガも、瞑想によって覚醒するポイントが脊髄に沿っていて、それを段階的に上昇することで完成するというのである。将棋がインドから中国に移入したように、道教の錬金術にインドのヨガの影響を指摘したわけである。さらに露伴は「テオソフィ」に言及し、「未だ完成した学問となっていないが」と留保をつけたうえで、「其宗徒の中の卓越せる者は、同じ修煉信行によって、同じ境地に達し、同じ霊験を得」るだろうと記している。このセオソフィ―こと神智学は、あらゆる宗教は同じ真理を語っていると考え、比較宗教学と親和性が高いためであろう。露伴の蔵書目録にセオソフィーを解説した書籍が残されているが、露伴はそこからヨガと道教とを比較する着想を得たのかもしれない。ヨガやチャクラについては、露伴が歪曲して紹介したキャリントンのヨガについての解説（アヴァロンの『蛇の力』の紹介）が典拠とみてまず間違いあるまい。そこに収録されたチャクラの図を見れば、露伴がいう象や魚が何か容易に特定できよう（図2）。図ではチャクラが7つなのが、露伴の本文では6つとあるのは、最上位の「サハスラーラ」はチャクラと考えず、ほかの6つをチャクラと数えているためである。いずれにせよ、学問的に正しいかどうかはおくとしても、ヨガと道教を結び付ける指摘は、ユングが『黄金の華の秘密』（1929）でわずかに示唆して以降、エリアーデが『ヨガ』（1954）で指摘し、浩瀚な『中国の科学と文明』の5巻5集（1983）でニーダムが論じるまで、ほとんどなされていなかった。たとえ、参同契の解説が多く元時代の俞琰による『周易参同契発揮』によっていたとしても、この露伴の指摘は、世界的にみてもかなり初期であることは強調しておいてよいだろう[54]。

---

54) Joseph Needham, *Spagyrical Discovery and Invention: Physiological Alchemy (Science and*

5　英語とブリタニカ百科事典

このように露伴は、作家として作品を書き始めた頃から晩年に至るまで、しばしば英語の文献を利用していた。いわゆる彼の「雑学の束」のいくぶんかは、英語の雑誌や百科事典を背景にしているといってよい。「方陣秘説」のように知識の習得のためだけでなく、『露団々』にみられるように英語の資料を豊富に用いて、異国らしさと新奇な表現を取り込んでいることも明らかになった。露伴の名で翻訳された「初陣」や『大氷海』、そして少年雑誌に掲載された読み物は、たしかに弟成友の協力なくては成立しえなかったと推測されるが、その選択には千島拓殖に従事した郡司成忠やトルコへ向かった山田寅次郎らの影響を思わせる例が多く、翻訳にも一定の工夫が見られた。語学の制限があるため、西洋の書物については、ある程度、絞り込んで調査せざるを得なかったためだろう、比較的傾向が読み取りやすいといえる。実際、海への関心から、積極的に海外の文献を援用していたことも確認でき、また「弓太郎」のように、英語資料からの間接的な影響がうかがえる例も判明した。児童文学以外では、「露国の滑稽作者」が露伴らしい書き換えとなっており、ドストエフスキーの「鰐」をいち早く紹介し、読んだ可能性も明らかとなった。

その一方で、英語文献を露骨に創作に援用した例は少なくなり、1900年の「将棋雑考」以降は、主に考証随筆で英語文献を利用している例が増えていく。『ブリタニカ百科事典』をほぼ翻訳しながらも、インドの将棋が東西の将棋の起源となった可能性を独自に指摘した功績は特筆に値しよう。ただし、以降、英語文献を参照した博物学的な随筆は、将棋の例にみられるようなしかるべき成果を挙げることはなかった。「聊斎志異とシカゴエキザミナーと魔法」のように、英語文献を流用することでかえって、失敗している例も見られた。逆にシベリアのマンモスが「神異経」にあるという、欧米では19世紀前半には知られていたことを知らずに発見と誤解することもあった。いずれにせよ「欧亜に跨る狼」あるいはマンモスのように、東西にまたがる文物の交流に関心を抱き、ラウファーの英語文献などを含めて熱心に研究と執筆を続けたものの、ジンギスカンの戯曲同様、それらは不首尾に終わっている。

むしろ成功したのは、心霊研究や神智学文献の応用だったかもしれない。「支那における霊的現象」のように、欧米偏重な研究状況にあって、従来の枠組みでは見逃されていた事例を明確に再発見しているからである。これは製鉄への関心から連続していった錬金術研究とあいまって「仙書参同契」で開花したといえるだろう。「聊斎志異とシカゴエキザミナーと

Civilisation in China, v.5. Chemistry and Chemical Technology; pt. 5) (Cambridge: Cambridge University Press, 1983), pp.257-300. 吉田光邦「中世の化学（練丹術）と仙術」薮内清編『中国中世科学技術史の研究』（朋友書店, 1998), p.203.

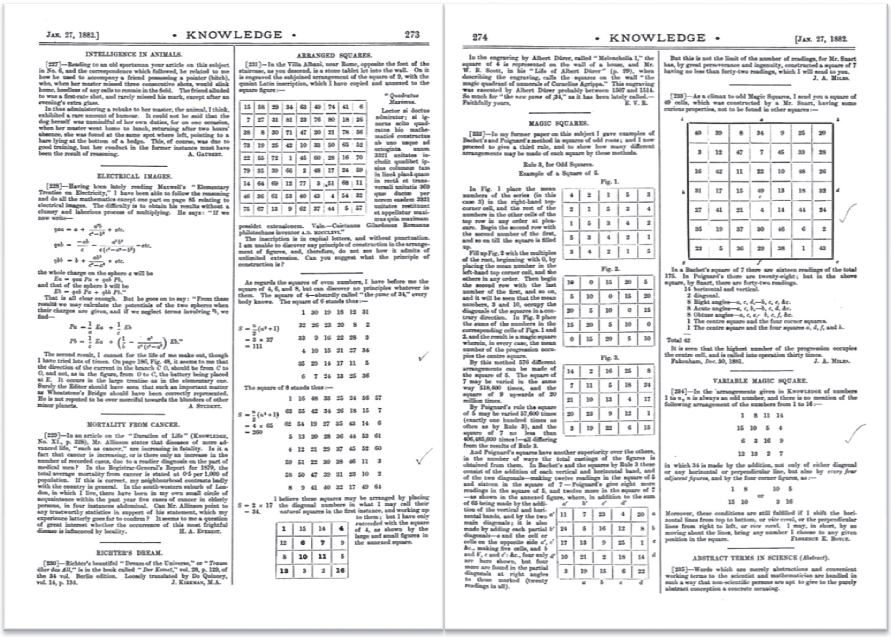
魔法」を書く際に引き写した文献からヨガとチャクラについての知識を得て、それが錬金術と対応することに気付いたからである。「方陣秘説」ではオーギュスト・コントそのままに進歩史観から、河図洛書から現代の魔方陣へと図式的にとらえていた露伴だが、「仙書参同契」になると、神智学を援用しつつ、ヨガと道教を等価にとらえようとしている。影響を受けたものと与えたものとで区別せず、独自の価値と意味とを見つけ出そうとする態度は、「支那における霊的現象」とも共通するものであり、これも露伴における英語文献の転用の典型といえるだろう。

最後に、露伴も愛読した『ブリタニカ百科事典』について付言しておきたい。9版を「将棋雑考」で利用した露伴が、その後の版を購入したかは不明だが、1910年から翌年にかけて刊行された11版には、後日譚ともいえる改訂がみられる。まずチェスの項目では、参考文献としてJ. A. Milesの*Chess Stars: A Galaxy of Self-mates*（1888）が挙げられている[55]。露伴が、「方陣秘説」を執筆する際に利用した記事の執筆者である。露伴が感銘を受ける一方で誤りを指摘したラウファーは、南方熊楠と交流があった。熊楠がロンドンにいた19世紀末、指紋の発見は中国にあるのかどうかをめぐって論争が起こっていた。熊楠は、署名の代替手段と人物の特定方法とを混同しているところがあったのだが、中国の事例について論文を投稿した。それを見たラウファーは混同を指摘しつつも、熊楠の論文に言及し、文通をするようになったという。そして、こうした経緯をふまえるかのように『ブリタニカ百科事典』では11版から、拇印（Finger-print）が初めて立項され、そこには名前こそ記されていないが、熊楠らの議論をふまえるような拇印の東洋起源説が記されたという[56]。当然のことながら、露伴が不備を指摘したチェスの項での中国の記述はそのままだった。ただし、大幅に拡大された日本の項目でその文学の項目には、「露伴は現代日本でもっとも有名な作家の一人であり、その歴史小説は広く人気を博した」という一文がある[57]。『天うつ浪』が途絶し、作品がしばらく途絶えていた頃であるが、露伴が読んでいたかどうかはわからない。

55）*Encyclopædia Britannica*, 11th edition (New York: Encyclopædia Britannica, 1910-1911), volume 6, p.106.

56）松居竜五・月川和雄・中瀬喜陽・桐本東太編『南方熊楠を知る事典』（講談社, 1993), p.451.

57）*Encyclopædia Britannica*, 11th edition, volume 15, p.171.



JAN. 27, 1882.] • KNOWLEDGE • 273

INTELLIGENCE IN ANIMALS.

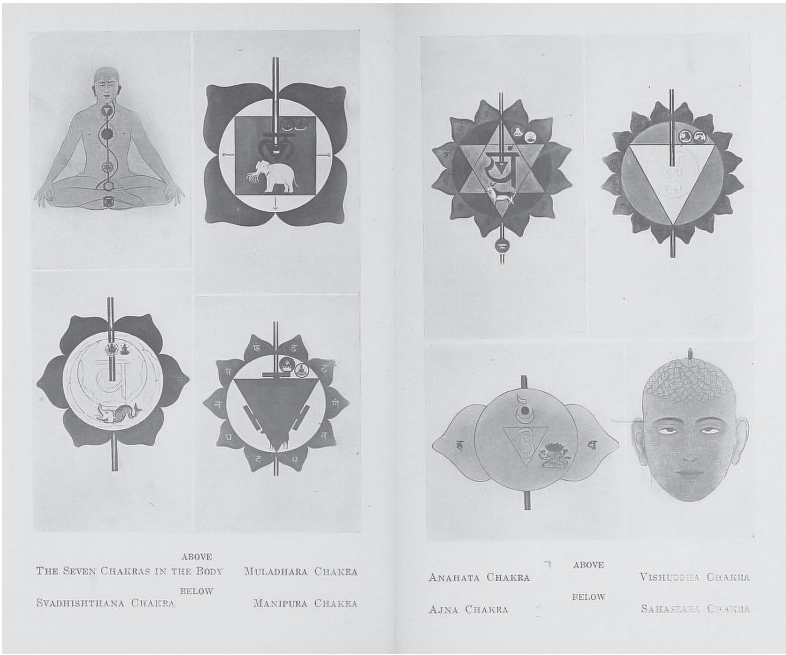
[227]—Reading to an old sportsman your article on this subject in No. 6, and the correspondence which followed, he related to me how he used to accompany a friend possessing a pointer (bitch), who, when her master missed three consecutive shots, would slink home, heedless of any calls to remain in the field. The friend alluded to was a first-rate shot, and rarely missed his mark, except after an evening's extra glass.

In this administering a rebuke to her master, the animal, I think, showed intelligence, and, moreover, it was clear that the dog ... ELECTRICAL IMAGES. ... MORTALITY FROM CANCER. ... RICHTER'S DREAM. ... ARRANGED SQUARES. ... "Quadratur Zitatenen. Lector si doctus adhuc ... ab uno usque ad octagintta ... 3321 unitates ... in black phack-quan ... et reciprocal ... J. A. MILNE.

274 • KNOWLEDGE • [JAN. 27, 1882.

MAGIC SQUARES. ... ABSTRACT TERMS IN SCIENCE (*Abstract*). ... J. A. MILNE.

図版 1　*Knowledge* 誌 1882 年 1 月 27 日号掲載の魔方陣の記事



図版 2　Hereward Carrington の *Higher Psychical Development (Yoga philosophy): an Outline of the Secret Hindu Teachings*（1920）から 7 つのチャクラとその位置

Appropriation or emulation? Koda Rohan's essays and their English originals

Yorimitsu HASHIMOTO

Koda Rohan is often considered to be something of an antediluvian survivor of the pre-modern Edo period in Japan. His tremendous knowledge of the classical literature of Japan and China, including Buddhist and Taoist scriptures, attracted attention to him and made his essays extraordinary, and his novels were also considered entirely different from the Westernized standard that contemporary writers followed. Certainly, Rohan had not completed regular Western-style higher education. However, he had attended extensive English courses, and according to the testimonies of his family and friends, he often commonly read English books. The plot of his first novel is based on a popular Chinese story, but the main character is an American Unitarian, and the book includes a number of American names and phrases such as Florence E. Boyce's magic square, along with several passages from the lesser-known works of E. A. Washburn and Walter Scott, which obviously indicates that Rohan used English documents that had not yet been translated into Japanese at that time. Using anti-Chinese immigration language in the United States, Rohan also became a pioneer by describing a Chinese character with several racially offensive translated epithets from English, such as 'rat eater' and 'pigtail.'

It is no surprise, therefore, that Rohan published translations of English literature without indicating the existence of an original text. Some of his juvenile stories (including 'Balloon Trip,' 'Winter in Sweden,' 'Turkish Slave Hamet'), reluctantly contributed on request for children's magazines, are simply translations. Perhaps for that reason, Rohan did not have these works collected in his lifetime. Meanwhile even several of his academic essays include translations, such as a discussion of an Indian rope trick argument in Hereward Carrington's *Higher Psychical Development (Yoga Philosophy)* (1920) and an article on chess from *Encyclopaedia Britannica*. These essays, with no reference to any original, appear to be simple plagiarism, but Rohan, possibly fascinated with the Eurasian wolf as a symbol of unknown, rich exchanges between East and West, tried to improve his sources, correcting mistakes in original English texts with inadequate grounding in obscure Oriental studies. For example, Rohan indicated the possible origin of Japanese chess (Shogi) in an Indian board game (Chaturanga) or the close similarities between Indian yoga and the alchemy of the Chinese Taoists, with reference to Theosophy.